



| | |
|--------------|---|
| Title | 江戸時代における中国近世語の受容：留守希斎撰『語録訳義』を通じて |
| Author(s) | 神林, 裕子 |
| Citation | 中国研究集刊. 1997, 19, p. 90-135 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/61105 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

江戸時代における中国近世語の受容

—留守希齋撰『語錄訳義』を通じて

神林裕子

(大阪大学)

はじめに

『朱子語類』を始めとする宋明の語錄の類は非常に難解である。その大きな原因の一つとして、文章中に当時の俗語を多く含んでいることが考えられる。そのため、これらの近世の俗語に関する研究や解説等が、今日に至るまで、多く著されている。

さて、日本における『朱子語類』研究の先駆者の人として、山崎闇斎（元和三年—天和二年、一六一八—一六八二）を挙げることができる。闇斎は、林羅山（天正二年—明暦三年、一五八三—一六五七）たちが『四書大全』を中心に朱子学の研究を進めたのに対し、『朱子語類』あるいは『朱子文集』を通じて朱

子を理解しようと努めた。

本稿は、この山崎闇斎および闇斎学派の人々が、先に述べたような語錄を読解する上で問題を、どのように解決していくかということについて述べる。その手がかりとして、崎門三傑の一人である三宅尚斎（寛文二年—寛保一年、一六六二—一七四一）の高弟、留守希齋（宝永二年—明和二年、一七〇五—一七六五）が編纂した『語錄訳義』を取り上げる。『語錄訳義』は、その名のとおり、語錄読解のための手引書である。そして、同書は、宋明の俗語に始まり、江戸時代には唐話と呼ばれていた、一七、八世紀の中国語に至るまで、解説を施している。本稿は、これを同時代に編纂された他の手引書と比較することによって、その特徴

を明らかにすることを目的としている。

(一) 先行研究

江戸時代の唐話研究については、石崎又造『近世に於ける支那俗語文学史』（昭和一五年・弘文堂書店）をはじめとする多くの先行研究がある。また、石崎又造の研究成果を中心に、『江戸時代の中国白話小説』に於ける諸研究の概略を記したものとして、斎藤護一

「徳川時代の漢文学（其三）——支那俗語学・支那俗文学」（『近世日本の儒学』所収・一九八四・岩波書店）がある。これらの先行研究によれば、江戸時代には、「唐話××」と題する、今でいう中国語実用会話を目的とした入門書が数多く編纂された。そして、こうした唐話学習熱の高まりを受けて、語録における俗語表現等に於ける研究も盛んに行なわれた。

しかし、従来の研究では、もっぱら唐話研究が日本の近世文学に及ぼした影響について述べられている。たとえば、中村幸彦「唐話の流行と白話文学書の輸入」（『中村幸彦著述集』第七巻「近世比較文学攷」所収

・昭和五九年・中央公論社）などがそれである。そして、これらの先行研究においては、荻生徂徠（寛文六年—享保一三年、一六六六—一七二八）や、徂徠が開いた訳社という中国語研究会の講師であつた岡島冠山（延宝二年—享保一三年、一六七四—一七二八）ばかりが取り上げられている。これに対し、語録の読解を目的とする、いわば、その読者層を儒者に限定する留守希齋の『語録訳義』は、これまで、あまり注目されてこなかつた。

なお、『語録訳義』についての専論には、鳥居久靖「留守希齋『語録訳義』について——近世日本中国語学史稿の一——」（『天理大学大学報』III-2・一九五二）がある（注1）。鳥居論考は、『語録訳義』の内容を具体的に紹介するとともに、特に『語録訳義』における引用書や、その引用回数について、かなり綿密な調査を行なつてゐる。しかし、鳥居論考は、こうした数量的な分析には詳しいが、その一方、思想史的側面からの解説に乏しく、たとえば撰者である留守希齋の学問的背景や、『語録訳義』の当時における位置付けについてほとんど言及していない。そうではある

が、以下、『語録訳義』の基礎的研究として、隨時、この鳥居論考に言及しながら論を進めてゆきたい。

『語録訳義』の撰者である留守希齋の事跡およびその撰述については、平重道「大阪の崎門学者留守友信の学問と人物」（『近世日本思想史研究』・昭和四四年・吉川弘文館）に詳しい。平論考を要約すると、次のとおりである。留守希齋、名は友信、通称は退藏、希齋はその号で、また括囊と号している。奥州一ノ関の出身で、初め、遊佐木齋（万治元年—享保一九年、一六五八—一七三四）に師事し、後にその養子となる。その後、京都に遊学し、ついに、養家を去つて、三宅尚齋に師事する。壯年からは、闇齋学があまり普及しなかつたと言われる大阪にて講席を開き、当地に没している。その間、宝曆二年（一七六二）に、闇齋の墓所の改修事業が行なわれた際には、希齋は、全国の闇齋学者を動員して、その一切を指揮している。このことから、既に沈滯期に入つていたとは言え、希齋が当時、闇齋学派における代表的人物であつたことが分かる。

そして、希齋と同門である山宮雪樓（享保年間の人）の『語録訳義』の序文からも、希齋がただ単に唐話に

通じた人物ではなく、儒者としてすぐれた人物であつたであろうことが窺われる。雪樓の序文に、『語録訳義』を高く評価した後、次のようにある。

然りと雖も公（希齋）の学大にして、此れ（『語録訳義』の編纂）特だ其の緒餘なるのみ。世の斯の書を観る者、或いは公の学を以て此に止むと為すは公を知る者に非ず。

なお、関儀一郎『近世漢学者伝記著作大事典』（昭和五六年・琳琅閣書店）によれば（注2）、その撰述は、次のようなものがある。『論語諸説』、『古本大學和解』二巻、『小学註』二巻、『和漢文会録』二巻、『和学訳通』四巻、『性論発端私解』、『師友明鑑』二巻、『称呼辨正』二巻、『称呼辨正後篇』一巻、『称呼辨正対問』一巻、『俗語録』一巻、『俗語訳義』二巻、『語録字義』一巻、『語録訳義』二巻、『八陣幾要』十巻、『八陣細説』十巻、『八陣図説』、『雄鑑抄聞録』三巻、『祭祀來格説講義』、『敬齋箴筆記』、『復姓実録』、『天爵録』、『括囊雜抄』四巻、『括囊遺筆』二巻、『書置』一冊。ただし、『和漢文会録』は、希齋と朝鮮通信使との問答の記録であり、おそら

く、『和韓文会錄』の誤りであろう。

山の名である。

(二) 『語錄訳義』のテキスト

『語錄訳義』は、未刊の書であるが、鈔本のかたちで広く流布して、現在に至るまで伝えられている。たとえば、長沢規矩也編『唐話辞書類集』第一七集（昭和四九年・汲古書院）に、「俗語訳義」の名で、收められている。この『唐話辞書類集』第一七集所収の『語錄訳義』は、その序・凡例および外題には「語錄訳義」とあるが、内題には「俗語訳義」とあり、『唐話辞書類集』はこの内題を探つて書名としているのである。

また、『唐話辞書類集』第二集（昭和四七年）には、千手旭山（安政六年—昭和四年、一八五九—一九二九）の手によつて増補された『語錄訳義』も收められている（注3）。旭山によつて増補された『語錄訳義』について、長沢規矩也の「解説」（『唐話辞書類集』第二集所収）は、流傳本の中二集所収）に、次のようにある。（以下、「解説」と記すのは、すべて『唐話辞書類集』の各本冒頭の長沢規矩也の解説を指す。）なお、「興成」とは、千手旭

留守友信撰、千手興成補。留守友信の同書を増補した書の一種で、原本に比すれば、原項目に増補したり、新項目を設けたりして、語彙は殆ど旧に倍してゐる。

おそらく、『語錄訳義』については、これら、『唐話辞書類集』に收められているテキストが、現在、もつとも利用しやすいものであろう。なお、この他、昭和三三年に、九州大学中国哲学史研究室から、楠本正継の家蔵本を底本として油印で出版された『増補語錄訳義』がある。同書は、旭山によつて増補された方の『語錄訳義』を底本としている（注4）。

次に、『語錄訳義』という書名について述べる。「解説」（『唐話辞書類集』第二集所収）は、流傳本の中に、「俗語訳義」、あるいは、「俗語釈義」という外題の『語錄訳義』が存在することを指摘している。このことについて、鳥居論考は、現存する伝鈔本は、多く「俗語訳義（時に釈義）」と呼ばれるが、初名はおそらく「語錄訳義」ではなかつたかと述べる。その理由として、鳥居論考は次の二点を挙げる。一つは、撰

者である希齋の「凡例」に、『語録訳義』が「漢土の語録・野史・方言・俚語の類」の解説書であると明記している点、もう一つは、山宮雪樓の『語録訳義』の序文の中に、同書を「語録訳義」と称している点、この二点である。本稿は、以下、その初名を探つて、「語録訳義」の名で統一する。なお、鳥居論考は、『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）が希齋の撰述として挙げる『俗語録』および『語録字義』について、その存否は未詳であるが、あるいは異名の同書ではないかと述べる（注5）。

さて、本稿は、テキストとして、『唐話辞書類集』第二集所収の旭山によつて増補された『語録訳義』を用いる。なぜならば、同書は旭山の校訂を経ている分、文字の誤りが少ないからである。旭山の序文にも、次のようにある。

伝写の久しければ、魯魚衍脱
頗る多し。余間ま
嘗て之れを校正し、且つ其の遺漏を補い以て初学
に授く。庶わくは、初学の文に臨み其の義を索
むるとき、則ち理義を求むるの一助たらんことを。
なお、旭山が新に採録した語彙は、すべて各画数ご

とに、「補」として一まとめに、希齋の採録語彙の後に付け加え注解している。また、旭山は、原著『語録訳義』の採録語彙にも注解しており、それらの補注は、各語ごとに、希齋の注解の後に「興成 云えらく」、または、「興成 按するに」として付記している。あるいは、旭山の補注の中には、按語のないものがあり、それが希齋の注解の中に紛れ込んでいる可能性がある。だが、この旭山も、希齋と同じ闇齋学派の流れを汲む人物であり、したがつて、同書をテキストとして用いることで、かりに、希齋の注解と旭山の注解とを混同することがあったとしても、闇齋学派の俗語研究のあり方を知る上で妨げにはならないであろう（注6）。

また、前出の「解説」にも、この旭山によつて増補された『語録訳義』は、「とにかく、未刊の同類の書中では、流布が最も弘い」とある。岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」（『朱子語類大全』所収・一九七三・中文出版社）も、『朱子語類』の俗語解説書の一つとして、旭山によつて増補された『語録訳義』を挙げ、それを評して「朱子語類の俗語解説の専書としては最も便利なものであろう」と述べる。したがつて、

以下、本稿が『語録訳義』として引用するものは、すべて、旭山によつて増補された、『唐話辞書類集』第二集所収の『語録訳義』からの引用である。

ただし、先の旭山の序文は、『唐話辞書類集』第二集所収の『語録訳義』には見られず、本稿は、油印本『増補語録訳義』に付されているものによつた。因みに、『陽明学体系』付録「陽明学体系月報」（第七号）に掲載されている「宋明俗語略解」は、この油印本『増補語録訳義』を底本としている。

(11) 『語録訳義』の参考書目

山富雪樓の『語録訳義』の序文に次のようにある。

『〔語録〕訳義』の書を為すや、凡そ語録の語の通曉し難き所の者、櫛比して縷分す。訓解 燦然として遺漏有る靡し。其れ後學に便なること大と謂うべし。世の聖經を読む者、宋朝の先賢の語録を読むに非ざれば、則ち其の平素教導の密を窺うこと能わず。而れども語録は之れ俗語多く、読者

往々にして其の通じ難きに苦しむ。今や此の書有りて斯の患い無し。何ぞ其れ幸いならん！

要するに、この序文によれば、『語録訳義』は、語録を読解することを主たる目的とした手引書であり、特に、語録中の俗語表現について解説したものである。

『語録訳義』の希齋の「凡例」にも次のようにある。漢土の語録・野史・方言・俚語の類、解し難きは、

字義転換して字書の正註に異なればなり。故に当に句読上に就きて其の意義を曉るべし。今、撰編する所の者は、熟字の連用する者を抄出し、而して国字を用て其の下に贅り、其の他、象胥（通訳官）の説を撮拾して以て此れに増補するものなり。

さて、『語録訳義』の特徴として、他書からの引用が非常に多い点が挙げられる。鳥居論考によると、同書の引用書は百種を越える。そして「これらの引用は、鳥居論考も指摘するように、〈注解のためのもの〉と〈出典として引かれるもの〉とに大別される。この〈注解のための引用書〉には、漢籍に限らず、江戸時代に編纂された、他の語録読解の手引書や唐話の入門書といった和書も多く含まれている。」

しかも、それは单なる引用に止まらず、希齋は、場合によつては、先人の説を訂正している。また、自説を述べる際には、必ず「友信 挿するに」と初めに明記している。なお、『語録訳義』は、漢文の箇所と漢字仮名交じり文の箇所とが併記されており、その表記は不統一ではあると言える。しかし、これは、諸解説を多く集めているという本書の性格上、止むを得ないことである。

では、『語録訳義』は、主にどのような書物を利用して編纂されたのであらうか。「凡例」に次のようにある。

引く所の諸もろの書題 長きを厭い、纔に一、二字を記すのみ。「解」字と書くは、『語録解義』なり。

「要」字と書くは、『唐話纂要』なり。「便」字と書くは『字海便覽』なり。

これによつて、『語録訳義』の最も多く利用した書物は、岡島冠山の『唐話纂要』（享保元年刊・一七一六）、同じく冠山の『字海便覽』（享保十年刊・一七二五）、そして『語録解義』であることが分かる。以下、『語録訳義』が基礎とした、この三書について述

べる。なぜならば、『語録訳義』がよりどころとする二書の性格を明らかにすることによって、『語録訳義』の編集方針、ひいてはその独自性について知ることができると考へるからである（注7）。

また、『語録訳義』は、先学として、浅見絅齋・井沢灌園・岡島冠山・荻生徂徠・古賀精里・沢田希・沢田常省・三宅尚齋・梁田蛻巣・山崎闇齋の名を挙げて、その言説を引用している。

① 『唐話纂要』

『唐話纂要』は、享保元年（一七一六）刊・同三年（一七一八）増補本が、『唐話辞書類集』の第六集（昭和四七年）に収められている。その「解説」（『唐話辞書類集』第六集所収）に言う。

当時最も流行した唐話の教科書で、卷一から卷三の前半までは、二字至六字の語句に、江南音を旁注し、和訳を下に加へ、卷三後半には常言（通行の格言）を録し、卷四是会話の発音及び訳文、その本文の体裁は明治の急就篇の先駆ともいふべきものである。

つまり、『唐話纂要』は、熟語あるいは慣用句の字数順に、「二字話」「三字話」「四字話」という章立てになつてゐるのである。これは、当時の辞書類の検索方法における、一つの典型であると考えられる。また、『唐話纂要』において注解される各語は、一見、何の規則性もなくただただ列挙されているような印象を受ける。したがつて、『唐話纂要』は、およそ検索に便利であるとは言い難い。しかし、実は、このような「章立て」および「各語の配列」は、『唐話纂要』の編纂目的と密接な関係にある。

まず、学習者は二字から始め、二字から三字へ、三字から四字へと、短いフレーズから徐々に長いフレーズへと、傍注に基づいて発音練習を繰り返し、暗唱する。そして、最終的には、「常言」から「長短話」という完全な文を話すことができようになることを目指す。つまり、「二字話」「三字話」という分類は、検索に資するためのものではないのである。換言すれば、『唐話纂要』は、あくまでも順序立て前から学んでゆく「教科書」であり、したがつて、いわゆる「辞書」のように、検索の便を図る必要性はないのである。

しかも、各章に列挙された各語は、その前後の語と互いに全くの無関係ではなく、何等かの共通する概念を持つている。たとえば、『唐話纂要』「二字話」の冒頭に次のようにある。

太平・享福・快樂・快活・爽快・興趣・有趣・娛樂・興旺・興頭・興昌・吉兆・吉祥・吉瑞・吉凶・利市・發財・造化・高興・爽利・如意・歡喜・中意・中用・安當・安穩・安泰・穩當・安樂・頑要・要子・游頑

以上のような「よろこびこと」に関する言葉が終わると、その後には次のような「もてなし」に関する言葉が続く。

喫飯・喫煙・請飯・用茶・喫酒・把盞・請酒・灑酒・盞酒・溫酒・泡茶・煎茶・赴筵・豐筵

そして、この後には、さらに「もてなしの言葉や動作」に関する言葉が続く。

請客・招客・邀客・請坐・請上・上来・上坐・平坐・寛坐・端坐・請寛・跪坐・閑坐・坐下・咲話

…

」のように、『唐話纂要』は、意味内容の近い、あ

違を示すまでには至っていない。)

（2）見出し語の下に、片仮名で和訳を記す。

（3）「長」「好」「中」「行」のように、意味の違いによって、中国語の発音の変わる字については、圈点を付す。

（4）長い熟語（あるいは慣用句）には、その傍らに訓点を付す。

このように、各語に中国音を振つてることから、『唐話纂要』が、まさに、唐話を「話すこと（発音すること）」を目的としていることが分る（注8）。そして、各語の傍らに訓点を振つてることから、唐話を「訓読によつて理解したい」という需要があつたことが分かる。たとえば、「方纏走去了」を「今ガタ。行レタ」と訳し、原文に訓点を振り、「方に纏に走り去り了る」と訓読している。他にも、「怎生他還不來」を「何トシテ。彼ハマダ來ラヌゾ」と訳し、「怎生ぞ他還て來ざるや」と訓読し、「差不多些好」を「大方ナラハヨヒ」と訳し、「差不多些にして好し」と訓読している。だが、このような訓読では、各句の本来の意味はまず取れないであろう。

では、次に、その注解方式について述べる。

（1）見出し語を挙げて、傍らに、その漢字の中国語の発音を片仮名で付す。（ただし、体系的な中國音の表記方法がない当時、『唐話纂要』は、その中國音に基づいて各語を分類し、発音の相

これに比べて、その和訳は、訓読調の逐語訳的なものではなく、おおまかではあるが、わかりやすい和訳である。また、『唐話纂要』は、解説として、この非常に簡潔な和訳を付すのみで、句中の一字一字について分けて解説していない。なお、『唐話纂要』の和訳のみを記す注解方式は、けつして「安易なもの」と称するべきではない。これは、「唐話の習得」ということを目指した場合、このような注解方式を探らざるを得なかつたからにすぎない。つまり、これは、学習者に各語あるいは各句を、一まとまりの「熟語」あるいは「慣用句」として理解させるためなのである。換言すれば、各語は、一言一句すべて実用に適した形、すなわち生きた言葉として取り上げられているのである。そのため、『唐話纂要』には、他書には見られる「一字話」の章がない。なぜなら、たとえば「了」や「得」などの一字の用法を知つていても、その一字だけでは、実際の会話の中で、何も伝えることができないからである。そこで、『唐話纂要』は、それよりも「完了」(シマシタ)」「解得來(カテンカイタ)」という語を覚えることの方に意味があるとしているのである。この

ことから、『唐話纂要』は、唐話を習得するに当たつて、決して文法的理解から入るものでないことが分かる(注9)。そして、これは、唐話を解説する際の、『唐話纂要』の一つの見識なのである。

② 『字海便覽』

『字海便覽』(一名、『經学字海便覽』)は、享保〇年(一七二五)刊本が、『唐話辞書類集』第一四集(昭和四八年)に収められている。その「解説」(『唐話辞書類集』第一四集所収)に言う。

朱子語類中の四書五經部分の俗語を摘録解釈したもの。原題箋(底本第七冊のみ存)には「經学」の二字の角書がある。

まず、『字海便覽』の章立てについて述べると、それは、「理氣」「鬼神」「性理」「學」「大學」「論語」「孟子」「中庸」……「本朝」「歴代」という、『朱子語類』の章立てにそのまま従つてある。そして、適宜、問題となる俗語を摘出し、注解を施している。「解説」は、ただ『朱子語類』の「四書五經部分」のみに注解しているかのように述べるが、実際は、『字

『海便覽』の注解は、『朱子語類』の全巻に及んでいる。もつとも、量的には、四書に関する部分が全体の六割以上を占めている。そして、この他、『朱子語類』の四書に至るまでの部分、五經に関する部分、五經から最終章までの部分が、それぞれ約一割強ずつを占めている。

要するに、『字海便覽』において注解されている各語は、章ごとに、『朱子語類』において使用される順に配列されている。そのため、『唐話纂要』同様、検索が非常に困難であり、各章ごとに最初から順を追つて検索する方法ではない。これは、まさに、『朱子語類』という特定の書物を前から順に読み進めるのを、その編纂目的としているためである。換言すれば、『字海便覽』は、『朱子語類』を読解するための〈参考書〉あるいは〈注釈書〉であると言える。

次に、その注解方式について述べる。

(1) 一字から五十字に及ぶ見出し字を掲げる。

(2) 二字以上の見出し字には、訓点を施す。ただし、一字あるいは二字のものでも、解説に、「……ト 読ム」などと、訓読の仕方を示すことがある。

(3) 見出し語の下に、和訳を中心とする〈解説〉を施す。

この〈解説〉の具体的な内容について言えば、まず、全句の和訳を示す。次に、熟語ごと、あるいは一文字ずつ、小分けにして和訳や訓読の仕方を示す。その後、同義語・類義語・反義語や用例を挙げるなど、懇切丁寧に説明している。なお、(1)で言う〈用例〉とは、〈典拠〉という意味ではなく、冠山が考案であろう〈例文〉のことと/or/を言う。また、「去声ニ読ムナリ」などと声調を示すものや、「差ハ音^{イシ} 鍵ニヨムベシ」などと音を示すものもある。中でも興味深いものは、和刻本『朱子語類』における、鵜飼石齋(元和元年—寛文四年、一六一五—一六六四)および安井真祐(元禄年間の人)の訓点を「古点」と称して、時に、「此ノ句 古点ニハ差ヒアリ」と述べて、その訓点を改めているところである。詳しいことについては、近々、別稿にて発表する予定である。いま、一例を挙げるならば、次のようにある。

只^{シテ} 認捲^チ 将^チ 去^レ トハ。ヒタスラ。マクリタテ、ユケト。云フコトナリ。是^{ヨリ}ハ戦ヒノ詞ナリ。只^{シテ}認ハ。

只管。只顧。只情ト同フシテ。ヒタスラト訓スル
ナリ。古点コチニハ。差ヒアリテ。義理通ゼズ。

なお、この解説からも分かるように、必ずしも各語について、先に挙げたような解説がすべて施されているわけではない。因みに、「古点」に従えば、ここは、

「只だ認捲し将ち去れ」という訓読になる。

以上のことから、『字海便覽』の解説が非常に逐語訳的であり、厳密な訓読法を提示していることが分かる。つまり、『字海便覽』は、『朱子語類』を読解するための参考書であると同時に、『朱子語類』を始めとする〈語録の類を訓読するための手引書〉でもあると言える。

しかし、ここで疑問が生じる。そもそも、冠山は、荻生徂徠とともに訳社を開き、〈訓読〉ではなく、中國音による〈直読〉を中心とする理解を推進した一派として知られる。ところが、先の『唐話纂要』においても、この『字海便覽』においても、明らかに、〈訓読〉ということに力点を置いている。このことを論じる前に、まず、冠山の経歴について、よく簡単に述べる（注10）。

冠山は、かつて、長崎の一通事の職にあつた。『唐話纂要』の林崇節なる人物の序文から、当時の通事に対するおおよその評価が窺われる。序文に次のように言う。

然り而うして通事の職 未だ以て貴しと為すに足らず。故に間ま英雄の士、其の職に補せらるるを肯んぜざる者有り。亦た宜べならずや。茲に岡島玉成子なる者有り。華の音と語とに精通す。一たび口を開けば、則ち錚々然として金玉の声を成し、一たび筆を下せば、則ち綿々乎として錦繡の句を聯ぬ。乃ち是れを以て当世に鳴り、嚇々として人の耳目を驚かせ、郁々として芳を遠近に流す者なり。茲に年有り。然れども通事の職に補せざずして、江湖に遊ぶは、無乃る其の職の貴とからざるを憎嫌せんか。嗚呼、英雄の志、必ず當に是くの若くなるべきのみ。

また、『先哲叢談後編』卷三には、冠山は、通事の職が賤職であることを理由に、その職を辞したとある。冠山 始め訳士を以て萩侯に仕え、其の月俸を受けど、自ら賤職為ることを懸て、辞して家居す。

専ら性理之学を修め、独り此を以て西海に鳴る。

この『先哲叢談後編』の記載によれば、どうやら、

冠山は少なからず宋学に通じていたようである。また、

『先哲叢談後編』卷三や、『徂徠集』卷一八「訳社約」

（『近世儒家文集集成』第三卷所収・昭和六〇年・ペ

りかん社）には、冠山が、国子博士林鳳岡（正保元年

－享保一七、一六四四－一七三二）の弟子員に加えら

れていたという記事もみられる。おそらく、冠山は、

鳳岡のもとで、かなり本格的に宋学を学んだものと思

われる。さらに、『唐話纂要』の垣内東皋（延宝八年

－享保一七年、一六八〇－一七三二）による跋文にも

次のようにある。

玉成岡鳶君は、世々長崎に家す。少きより華客に

交わりて其の語に習熟す。凡そ四書・六經より以

て諸子百家・稗官小説の類に及ぶまで、其の声音

の正と、詞言の繁と、頗る其の閻奥を究む。

なるほど、冠山は『日本諸家人物誌』に「儒者」と

して記され、『儒林姓名録』や『漢学名家録』にも、

その名が收められていることから、冠山の当時における位置付けは、たしかに「儒者」である。しかし、そ

の講義内容からみて、いわゆる儒者とは異なつていたようである。『先哲叢談後編』卷三に言う。

冠山 経史を講説し、生徒に誨督すること、其の

為す所 世儒に大に異なり。世の儒者 必ず仁義

道德治亂興廢を以てす。辨論鄭重、間ま煩冗に涉

る。欠伸を生ぜざる者 少なし。冠山 専ら時世

目撃の事実を言う。

このように現代に大きな関心をもつ冠山の興味は、

当然、当時の現代語の語学的な方面、すなわち唐話そのものに向かっていたと言える。したがつて、冠山の

撰述を見ても、その大半は、唐話に関するものと文学

に関するものとである。まさに、近世日本俗文学の大家と言われる所以である（注11）。

ところが、これに比べて、經書に関する撰述としては、『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）によれば、

わずかに『字海便覽』と『四書唐音辨』とが挙げられるのみである（注12）。しかし、『四書唐音辨』は、石崎

又造「江戸に於ける支那語学の流行」（前出『近世に於ける支那俗文学史』所収）や、青木正児「岡島冠山と支那白話文学」（『青木正児全集』第二集「支那文

「藝論藪」所収・昭和四五年・春秋社)によれば、朝岡春睡なる人物の撰述であり、冠山はその序文を記してあるだけである。また、『近世漢学者伝記著述大事典』(前出)にはみられないが、石崎論考には、冠山の撰述として、『唐音学庸』が、实物の写真を挙げて紹介されている。氏によれば、「内容は大学と中庸に夫々唐音を附したもの」であり、同書には、どうやら唐音が付されているのみで、その内容に関する注釈は記されていないようである。つまり、冠山には、自己の語学力を通じて、朱子学の本質にかかわるような問題を論じる撰述がないのである。換言すれば、この『字海便覽』こそが、冠山にとっての、ほとんど唯一の経学研究の成果であると言える。

この点について、柳沢淇園(元禄一六年—宝暦八年、一七〇三—一七五八)の『独寢』(筆者未見)に、次のようにある。

岡嶋援之は長崎にては、長左衛門と言ひしものなり、華音には奇なる生まれなり。服部元齋がいふには、和中の華客なり、といひしも尤なり、学才は余りなしとかや。

「元齋」とは、荻生徂徠の弟子の服部南郭(天和三年—宝暦九年、一六八三—一七五九)の名である。南郭によれば、冠山は「学才は余りない」ようである。しかし、「和中の華客」と称されていることから、冠山の語学力が群を抜いていることが分かる。そして、それは誰もが認めるところであった。たとえば、『唐話纂要』の高瀬学山(寛文八年—寛延二年、一六六八年)による序文に次のようにある。

独り我が友、玉成子、能く萃を抜く者か。玉成は崎陽の人なり。少くして大志を発し、長じて東都に来る。其れ口を開きて唐を譚じ、筆を揮て和を訳すや、恰も仙人の戸解するが如し。凡骨庸胎を將て一時に脱換して、独り其の衣冠のみを餘して化せざるが」とし。一起一坐、一咲(笑うこと)一咳、唐に尙ずということ無し。嘗て崎陽に在りて諸唐人と相い聚りて譚論す。其の調戯謾罵、彼と絲髪も差わず。傍観の者、惟だ衣服を辨じて其の玉成なることを知る。其の技の妙、大率ね此くの如し。

また、『唐話纂要』の原武郷子なる人物の跋文にも、

次のようにある。

予が友 玉成子は、長崎の人なり。幼きより唐音を学び、沈潛反覆すること今まで三十年。其の語、其の音、四声を宣ふること精暢たり。人の能く其の右に出づる者無し。長崎と唐国とを差ぶるに、壤地 相い接す。往来 甚だ多し。玉成 其の間に生長し、日々唐人と臂を交えて談喚す。特り其の口の唐なるのみならず、遂に一身をして変ぜ使めて唐為り。其の行くや、唐なり。其の止まるや、唐なり。其の立つや、唐なり。其の坐るや、唐なり。為して唐ならざる無し。

以上のことからみて、冠山が、特に『字海便覽』において、訓読に拘るのは、その卓越した語学力に加えて、日本の儒者の伝統である「訓読」の能力を有してゐることを、いわゆる儒者たちに示すためであつたとは考えられる。

なお、『字海便覽』については、『東京支那学会報』大会臨時号（昭和一九年）に、中山久四郎「経学字海便覽について」という講演の短い記録がある。この記録に、「此一書の外「語錄箋解」「忠義水滸伝解」な

ども参考するに足ります」とある。」で「語錄箋解」に関しては、「『織田文庫図書目録』（昭和一六年・無窮会）に「語錄箋解、附素読一助、貞享三」とあるが、その詳しい内容については、同書を実見していないため未詳である。また、「語錄訳義」中、「箋解云」とあるのは、氏の語うどんの『語錄箋解』であろうか。

なお、実見していないが、油印本『語錄訳義』と同様に、楠本正繼の家蔵本を底本とした、『字海便覽』が九州大学中国哲学研究室から昭和三一年に油印で出版されている。

③ 『語錄解義』

「」まで、岡島冠山の『唐話纂要』および『字海便覽』について述べてきた。本節では、留守希齋の『語錄訳義』が基礎とする、第三の書、すなわち『語錄解義』について述べる。

『語錄解義』は、その書名から分るように、これも語錄を読解するための手引書である。その注解は、すべて非常に短い漢文で記されており、『唐話纂要』や

『字海便覽』のような和訳は付されていない。内容的には、注解があまりにも短いため、特にこれと言つた特色は見い出せない。

鳥居論考によれば、『語録解義』中、『字海便覽』からの引用回数は、計九十九回であり、『唐話纂要』に対する引用回数は、計五十五回である（注13）。これからの引用回数は、計六十六回と、前出の二書に比べてかなり少ない。

しかし、既に述べたように、『語録解義』の「凡例」にその書名を挙げている以上、撰者である希齋が、この書をかなり重視していたと考えられる。

現在、内閣文庫に、「語録解義」と題する鈔本が二本、蔵有されている。『内閣文庫国書分類目録』を見ると次のようにある。なお、引用中の（ ）および〔 〕は、原文のママである。

語録解義

（延宝六年跋刊本）

林信勝（羅山）写

〔語録解義〕

語録解義合写

〔林信勝〕（語）山崎嘉写

同目録は、前者の『語録解義』の撰者として、ただ

「林信勝（羅山）」とのみ記している。ところが、後者については、撰者として、「山崎嘉」（嘉は、闇齋の名）と記すものの、そのすぐ上に「」付で、羅山の名を併記している。これは、何を意味しているのであろうか。以下、この『語録解義』の撰者について、先行研究を踏みつつ検討してゆきたい。

なお、「語録解義」については、近藤啓吾「『語録解義』の発見」（『山崎闇齋の研究』・昭和六一年・神道史学会）に詳しく、本稿が行なつた『語録解義』に関する今回の調査は、近藤論考と一部、重複している。しかし、あえてその内容を繰り返すのは、再確認と若干の補いを加えるためである。

さて、内閣文庫が蔵有する両書を実見したところ、次のようなことが分かつた。まず、羅山が編纂したとされる『語録解義』（以下、羅山本と略記する）と、闇齋が編纂したとされる『語録解義』（以下、闇齋本と略記する）とは、採録語の配列や、解説の文字がわずかに異なる以外、その記述は、ほぼ一致しているのである。要するに、内閣文庫が蔵有する二本の『語録解義』は、同一の内容、すなわち、同一の書なのである。

そして、さらに、この「内閣文庫所蔵の『語録解義』」を、
「『語録訳義』」に引かれる「『語録解義』」と比較
したところ、両者の記述は、これもまた、ほぼ完全に
一致した。つまり、「内閣文庫所蔵の『語録解義』」
は、まず間違いなく、「『語録訳義』」に引かれる「『語録
解義』」であると言える。

ただし、羅山本と闇齋本との巻末には、それぞれ付
録が付されており、羅山本には『常話方語』と「与汪
徳夏筆語・与朝鮮進士文弘續筆語」とが付され、闇齋
本には『常話方語』と『語録辞義』とが付されている。
つまり、両者はいずれも三部構成になつてゐるのであ
る。このうち、両者に共通する『常話方語』は、『語
録解義』同様、両者の間に大きな違いは認められず、
同一のものである。すると、両者の違いは、それぞれ
の巻末の付録、すなわち、「与汪徳夏筆語・与朝鮮進
士文弘續筆語」と『語録辞義』とにあることになる。
これらの付録について、もう少し詳しく述べると、
まず、『常話方語』は、これも宋明の語録中に見られ
る俗語を解説したものである。その注解方式は、初め
に見出し字を挙げ、その下に和訳を記している。『語

録解義』が、すべて漢文で解説を施しているのに対し
て、「常話方語」は、「理会 合点スルヲ云」などと、
漢字仮名交じり文で記されている。

その撰者については、「『語録解義』所収の『常話方
語』には、特に、何も記されていない。しかし、同書
は、現在、「唐話辞書類集」第五集（昭和四六年）に
収められており、そこには、「右、『常話方語』、浅
見先生ノ雜記ヲ以写ス」という識語がある。「浅見先
生」とは、闇齋の弟子である浅見絅齋（承応元年—正
徳元年、一六五二—一七一）である。この識語から、
同書が、絅齋の俗語に関する記事を、その弟子が集め
たものであるということが分かる。（注14）。

次に、「与汪徳夏筆語」と「与朝鮮進士文弘續筆語」
について述べる。「与汪徳夏筆語」は、羅山と汪徳夏
なる人物との唐話に関する問答の記録である（注15）。
「与朝鮮進士文弘續筆語」は、文字どおり、朝鮮の進
士である文弘續（号は、白眉）との問答の記録である。
その注解例を挙げると、たとえば、「『語録解義』所収
の「与汪徳夏筆語」に、次のようにある。

一、林氏曰く、驕の字義は奈何。汪曰く、驕は害

の義、人の銀を借りて公心（法律や約束を守る良識）を以てこれを還すをせざるが如きは、則ち騙なり。又た俗語に曰く騙は誑なり。

これらは、それぞれ、『羅山先生文集』（大正七年・平安考古学会）巻五九「雜著四」および巻六〇「雜著五」に収められている。『語錄解義』所収のものは、『羅山先生文集』所収のものより条目の数が少なく、配列や字句もやや異なるが、少なくとも「与汪德夏筆語」および「与朝鮮進士文弘績筆語」が、羅山の俗語に関する言説であることは間違いないであろう。

なお、羅山本の巻末には、「此の書 羅山先生の編述なり。与 秘めて出ださざること尚し。今 梓鏤し。て以て万世に伝えんとするものなり」とあり、また、続けて、「于時延宝六戌午（一七六八）曆正月上澣吉日 下總国本庄住人依田氏 山本九左衛門板行」とある。この識語によれば、羅山本は、かつて刊行されたようである（注16）。

最後に、『語錄辭義』について述べる。これも『語錄解義』や『常話方語』と同様、語錄読解のための手引書である。まず、その前半の体裁は、『語錄解義』

とよく似ており、一部、漢字仮名交じり文で記されているが、大部分は漢文で「討 尋也」「了然 明々の貌なり」「伎倆 才也、智術也、猶技能と言うが」としなどと記されている。また、一部、異体字について解説を施して、「聖 聖に同じ」「大 然に同じ」などと記している。このような異体字に関する解説は、『唐話纂要』および『字海便覽』にはない。これが後半になると、今度は、『困学紀聞』を初めとする数種類の書物から俗語に関する記載を、計二十九条、引用している。

この『語錄辭義』の撰者については、その巻末には「きりと「右、山崎氏 之れを撰す」とある。そして、近藤論考も指摘するように、特に、『語錄辭義』の後半部分に引用される記載は、すべて闇齋の『文会筆録』に引用されているものばかりである。このことから、『語錄辭義』が、たしかに闇齋の手によるものであることが分かる。なお、近藤論考は、『語錄辭義』を、『文会筆録』に先駆けて著された、闇齋の俗語に関する「未完の幻の書」と見なしている。

以上、羅山本および闇齋本の巻末の付録について述

べてきた。まとめると、羅山本には、嗣斎の『常話方言』と羅山の「与汪德夏筆語・与朝鮮進士文弘續筆語」が付され、闇斎本には、嗣斎の『常話方言』と闇斎の『語錄辭義』とが付されている。すると、本節の冒頭に挙げた『内閣文庫国書分類目録』が、闇斎本について、撰者として闇斎の名を挙げると同時に羅山の名を挙げ、かつ、「語錄辭義合写」と付記しているのは、同目録が、闇斎本を（羅山の『語錄解義』に、闇斎の『語錄辭義』を付したもの）とみなしているからであろう。また、同目録が闇斎本の書名に「」を付しているのも、便宜上、その巻頭にある『語錄解義』をもつてその総名としているものの、やはり同書を「語錄解義」と題することへの疑問を残しているためであろう。

補訂版『国書総目録』なども、おそらく、これを受けて、羅山の撰述として『語錄解義』を挙げ、「内閣（一冊）（語錄辭義と合）」と記し、『語錄辭義』については、闇斎の撰述とし、「内閣（語錄解義と合一冊）」と記している。つまり、同目録も、闇斎本を（羅山の『語錄解義』に闇斎の『語錄辭義』を付したもの）としているのである。

また、補訂版『国書総目録』も、闇斎の撰述として、『語録辞義』のほかに、『語録解義』を挙げている。ただし、これについては、「『続史籍集覽』『番外雜書解題』による」と付記している。そこで、この近藤瓶城『続史籍集覽』第一〇冊（昭和五年・近藤出版部）所収の戸田氏徳「番外雜書解題」第一七巻を見ると、『語録解義』一巻、一冊、写、山崎闇斎、朱子の語録中より俗字及び俗語の尤も解しかたきものを記出して逐一その義を解したる書なり」とある。この記述は、先の『国書解題』と非常によく似ており、『国書解題』は、おそらく、この『続史籍集覽』によつたものと思われる。

以上のことから、次の二つの可能性が考えられる。

一つは、羅山の『語録解義』とは別に、闇斎にも「語録解義」と題する撰述があつたという可能性である。

もう一つは、諸解題が挙げる闇斎の『語録解義』とは、本稿のいわゆる闇斎本を指すという可能性である。換言すれば、巻末に闇斎の『語録辞義』を付す『語録解義』を見て、本来、羅山の撰述であるものを闇斎の撰述としたのではなかろうかというものである。

この一つめの可能性を否定することは難しい。だが、少なくとも、『山崎闇斎全集』（昭和一二年・日本古典学会）および『続山崎闇斎全集』（昭和一二年・日本古典学会）には、「語録解義」と題する闇斎の撰述は採られていない。また、『続山崎闇斎全集』下巻の巻末にある「闇斎先生著書解説」にも、「著書」としてのみならず、「編次書」「存疑・仮托書」としても記載されていない（注18）。

かりに、二つめの可能性を探るならば、この混乱の原因は、闇斎本および羅山本の巻末の付録、あるいは巻末の識語にあると考えられる。つまり、諸解題は、これに基づいて、それぞれの巻頭の『語録解義』の内容が同じであるにもかかわらず、一方の『語録解義』を「林羅山撰」、もう一方の『語録解義』を「山崎闇斎撰」としたのではなかろうか。

だが、そもそも、羅山本および闇斎本の巻頭にある『語録解義』は、『内閣文庫国書分類目録』が言うように、本当に羅山の撰述なのであろうか。羅山は、闇斎同様、あるいは、それ以上に、その撰述とされるものの中には、いわゆる仮託書の類が多い。したがつて、

何をもつて羅山の撰述とするかの判断は非常に難しく、しかも、その根拠となるような、『語録解義』に関する序跋の類が『羅山先生文集』（前出）に採られておらず、『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）にも、羅山について、「語録解義」と題する撰述は挙げられていない。すると、三つめの可能性として、『語録解義』は、実は、闇斎の撰述であり、羅山本こそ、（闇斎の『語録解義』に羅山の俗語に関する問答を付したもの）という可能性が出てくる。

ただ、あるいは、それを、闇斎、または、羅山の付録を含めて、一冊の『語録解義』という書物と見れば、両書を（内容の（一部）異なる二つの書物）とみなすこともでき、あながちこれを混乱と言つことはできない。

ところが、このような状況のもとで、鳥居論考は、本稿が示す二つめの可能性については、一切、考慮しておらず、あくまで、羅山および闇斎のそれぞれに、「語録解義」と題する撰述が存在するとしている。し

かも、特にその根拠を述べずに、『語録訳義』が引くところの『語録解義』の撰者は、羅山であるとしてい

る。なお、鳥居論考の両書に関する記述は、石崎又造の「附録」の記述と全く同じであり、おそらく、鳥居論考は、（）の「附録」に、ただそのままよつているのであろう。したがつて、氏は、当然、内閣文庫の羅山本および闇斎本を実見していないものと思われる。

これに對して、近藤論考は、たしかに、羅山本および闇斎本を実見している。しかし、本稿が示す一つめの可能性については言及せず、二つめの可能性のみを採つている。そして、『語録解義』の撰者を羅山と断定し、その根拠として、羅山本の冒頭、すなわち、内題の下に「林氏編」とあること挙げている。その上、近藤論考は、闇斎本の巻末にある「右、山崎氏、之れを撰す」という識語は、『語録解義』の巻末部分、すなわち、『語録解義』にのみかかるとしている。だが、闇斎本の冒頭には、「林氏編」という識語はなく、また、鈔本という同書の性格上、羅山本の冒頭のこの識語がどこまで信用できるものなのか疑問である。

ここで、本稿は、この『語録解義』は、むしろ、闇斎学派と関わりの深い撰述であると考える。なぜなら、留守希斎の『語録訳義』以外に、闇斎もまた、『文会

筆録』の中に『語録解義』を引用しており、あるいは、同書は、闇斎学派において、比較的重要視されていた書物と考えられるからである。なお、『語録訳義』が引く『語録解義』の記述と、『文会筆録』が引く『語録解義』の記述とは一致するので、両者は、たしかに同一の書である。

また、闇斎の弟子である三宅尚斎の『黙識録』卷六『經伝』にも、『語録解義』に関する記載が見られる。

『語録解義』卷一は、漢土の人の作る所にして、『〔文会〕筆録』も亦た之れを引く。『〔朱子〕語類』謂う所の『小学字訓』は、恐らくは『性理字訓』を指すなり。『讀解』、『性理字訓』、『善言』、『義理』。

。

ここまで、『語録解義』の撰者を闇斎とするか、羅山とするかについて論じてきたが、実は、この尚斎の記載によれば、『語録解義』は、「漢土の人の作る所」であつて、日本人の手によるものではないのである。また、その内容からみて、尚斎の言う『語録解義』と、闇斎の利用した『語録解義』（すなわち希斎が引用する『語録解義』）とは、同一の書であり、このことは、

尚斎が、闇斎の直接の弟子であることを考え併せれば、まず間違いないであろう。

では、内閣文庫が蔵有する『語録解義』が、日本人の手によるものでないならば、羅山および闇斎は、この『語録解義』と、一体、どのような形で関わつたと言うのであらうか。一つ考えられるのは、これまで言われてきた〈林羅山撰〉あるいは〈山崎闇斎撰〉といふのは、純粹な意味での〈著述〉を意味するのではなく、羅山あるいは闇斎によつて再編集された〈編著〉、あるいは、その手によつて校訂された〈復刻本〉といふ意味で用いられているのではなかろうか、といふことである（注19）。そうすれば、あるいは、両者に、それぞれ、同名同一の書物があつてもおかしくはない。

既に述べたように、本稿は、『語録解義』が、闇斎学派の人々の撰述の中に、しばしば登場していることから、闇斎学派の人間が何らかの形で『語録解義』の編集に関わつたのではないかと考える。ところが、近藤論考は、本稿とは逆に、『語録解義』が『文会筆録』に引用されていることを根拠に、次のように述べる。

「闇斎が『文会筆録』の中で、」しばしば俗語の

注解に『語録解義』を引いており、しかもその文脈から見てこれは闇斎が自著を引いたものとは考えにくいから、これは『語録解義』という別人の著書があつて、闇斎はそれより引用したものといふべきであらう。

つまり、近藤論考は、かりに『語録解義』が、闇斎の自著であるならば、それを別の自著、すなわち『文会筆録』の中で、「『語録解義』に曰く」として引用するのはおかしいと言うのである。しかし、既に述べたように、『語録解義』が、闇斎の〈編著〉あるいは〈復刻本〉であるならば、たとえそれを自著の中に引いても、一向に不自然ではない。

一方、阿部吉雄「闇斎の朱子学文献研究と李退渓」（『日本朱子学と朝鮮』所収・一九六五年・東京大学出版会）は、次のように述べる。なお、「退渓」とは、朝鮮、李朝の代表的朱子学者、李滉（一五〇一—一五七〇）の号である。

闇斎の「文会筆録」を見ると、「語録解義」や「退渓集」を引用して、俗語の解釈をなしているところが数条見える。筆者は久しくこの「語録解義」

なる書の著者を知ることができないでいるのであるが、おそらく、李退渓とその門人柳希春（眉巖）の原著「語録解」と何等かの関連のある書ではないかと思つてゐる。その理由の一つは、「文会筆録」の引用文と「語録解」とを比較してみると、共に一字類、二字類、三字類というように分類している点が一致し、また文章が多く一致している所があるのである。ただし「語録解」は、或る所は漢文で書き、或る所は諺文で書いてあるが、「語録解義」の方は、「文会筆録」に引用されているものは全文漢文で書かれている。従つて諺文の部分を漢訳して比較検討しなければ、もちろん正確なことはいえないが、書名の点より考え、また中国ではこの種の著作の不必要な点などより考へて、この「語録解義」は「語録解」に関係ある著作であり、少くとも朝鮮系統の本ではなかつたかと考えるのである。三宅尚斎の「默識録」に、「語録解義、小本一巻、漢土人所作」と見えるが、中国でこのような書は、作られなかつたと思う。阿部論考は、「語録解義」を朝鮮系統の本ではない

かと述べ、中國系統か朝鮮系統かという問題は残るもの、本稿と同じ、『語錄解義』を日本人の手によるものでないとする立場であると言えよう。

また、阿部論考は、闡齋の『文会筆録』が、『語錄解』の他にも、李退渓の文集や『朱子語類』の中の俗語を解釈して、朱子の文集や『朱子語類』の中の俗語を解釈している実例を挙げ、闡齋学派が盛んに朝鮮系統の書物を参考にしていることを指摘している。

ところで、この一字類・二字類・三字類という分類についてであるが、『文会筆録』に引かれている『語錄解義』は、たしかに『『語錄解義』二字類』・『『語錄解義』三字類』と記しているが、内閣文庫所蔵の『語錄解義』を見ると、一字類・二字類・三字類といった分類になっておらず、一字と二字と、二字と三字・四字とが入り混じっている。近藤論考はこの点を挙げて、阿部論考に反論し、『文会筆録』の分類は、「闡齋がこれを自著に引用するに当つて、便宜上、二字類・三字類といふ表現を行つたと思はれる」と述べ、『語錄解義』を朝鮮系統の本とする阿部論考を否定している。

そこで、阿部論考が挙げる『語錄解』を実見したと

ころ、それは『語錄解義』と書名が似ているのみならず、次のいくつかの共通点が見られた（注20）。たとえば、その採録語は、内閣文庫所蔵『語錄解義』が採録する二三〇語（内、二語が重複しているため、実質は二二八語）中、二〇六語が『語錄解』の採録語と同じである。また、『語錄解』は、一部、ハングルで表記されているが、その漢文で記された部分の解説だけを見ると、両者の記述は、非常によく似ており、両者が全くの無関係であるとは思われない。そこで、実際に『語錄解義』の解説と『語錄解』の解説とを比較したものが、本稿付録の一覧表である。ただ、そのハングルの内容については、それが近代以前の語を多く含み、現代韓国人にとつても読み解に困難な所が多いため、現在、私は韓国人研究者と共同で研究中である。

要するに、近藤論考は、『語錄解』の形式（分類方法）については言及しているが、その『語錄解義』の内容（記述）の類似性に触れていない。これは、おそらく、近藤論考がこの『語錄解』を実見していないためと思われる。

以上をまとめると、まず、『語錄解義』の〈原著者〉

については、おそらく、日本人の手によるものでないということ以外は、依然、未詳である。次に、現存する『語録解義』の（編者）についても、羅山とみなす説が、多数を占めているようであるが、『語録解義』の編集に、闡斎学派の人間が何らかの形で関わったのではないかという可能性も捨てきることはできない。

その理由として、一つには、『文会筆録』を筆頭に、『默識錄』『語録訳義』など、闡斎学派の書物中に、しばしば、この『語録解義』が引かれ、闡斎学派において同書が重視されているという事実があるからである。もう一つには、『語録解義』と李退溪の『語録解』との類似性から、やはり朝鮮朱子学派と関係の深い闡斎学派の人間が、その撰者として浮上してくるからである。また、一つには、羅山本と闡斎本とのいすれにも、『語録解義』の付録として絅斎の『常話方語』が付されていることに對して、納得のゆく説明がなされていないからである。特に、かりに、『語録訳義』を羅山の撰述とするなら、羅山本において、なぜ、羅山の撰述と撰述との間に、闡斎の弟子である絅斎の『常話方語』が付されているのであろうか。これは、やは

り、巻頭の『語録解義』と『常話方語』とが何らかの連関性をもつと考へるべきではなかろうか。つまり、闡斎が編纂した『語録解義』に、その弟子である絅斎の『常話方語』を付したと考へらるべきではなかろうか。また、闡斎本において、『語録解義』、『常話方語』、『語録辞義』の三書は、いずれも語録を（読む）ということを目的としているが、これに対しても、羅山本の巻末の問答は、少し異質である。しかし、いずれも推測の域を出ず、『語録解義』の撰者を、限定する理由としては不十分である。したがつて、ここでは、その可能性を示すに止める。

なお、『語録解義』および『語録解』が、いずれも稀観本であるが故に、上記のような種々の見解が生じていた。しかし、本稿の注に、その所在を明記しておいたので、今後は、ぜひとも原本を参照されたい。

（四）『語録訳義』

さて、本題に返つて、留守希斎の『語録訳義』について述べる。同書の最大の特徴は、採録語彙が、すべ

て各語の頭字の画数順に配列されている点である。この分類法は、韻書のような「音」をもとに分類する系統とは異なり、漢字の「形」に主眼を置いた分類法であると言える（注21）。しかし、結果的には、既に述べたような完成度の高い冠山の撰述をばらばらにしていることにもなる。たとえば、『語録訳義』「五画」の冒頭に次のようにある。

白田水田・白々地・回該・另外・生授・叮囑・主意・外首・白地・仔細検点・布算・主子・末稍・甘心・主張・他們・半二不三・半上半下・半上落
下・收拾・本色……

「」に引用するように、各語は、相互に何の関連性ももたず、機械的に列挙されている。ただ、同じ頭字をもつ語ができるだけ前後に配列しようとしている。したがつて、『語録訳義』の分類法は、「類書」に代表されるような概念別、すなわち「義」に主眼を置いて分類する系統とも異なるのである。換言すれば、『語録訳義』は、言語を「物」としてとらえており、『唐話纂要』のように、実際の会話における「場」については考慮されていない。ここに徂徠学派と闡蕪学派と

の俗語研究に対する意識の相違が窺われる。

つまり、『語録訳義』は、先の『唐話纂要』のような唐話の「教科書」でもなければ、『字海便覽』のような特定の書物に個別的に対応する「参考書」でもない。その形態は、一般性をもつた「辞書」に最も近いと言える。

次に、『語録訳義』の注解方式は、『唐話纂要』『字海便覽』『語録解義』同様、見出し字を挙げ、その下に和訳を中心とする解説を施すものである。しかし、見出し語は、『字海便覽』のように、一つの完全な文や句を挙げるような長いものは少ない。また、解説は、『唐話纂要』のような、端的なものから、長いものでは、一葉から二葉に及ぶものもある。鳥居論考は、この『語録訳義』の注解方式を次の六種類に分類している（注22）。

- (a) 単に和訳のみを示すもの
- (b) 和訳を附せず出典のみを挙げるもの
- (c) 和訳を附し出典を挙げるもの
- (d) 和訳を施し、該語に対する他書の注解または先人の言説を引用してその意義を更に明らかにする

るもの

(e) 他書の解釈を引き援語を加えてこれを正しある
いは批判するもの
(f) 見出し語の類語を挙げて同時に説明するもの
以上の注解方式を先の『語録訳義』が基礎とする『唐
話纂要』および『字海便覽』の注解方式と比較してみ
る。なお、『語録解義』は、未詳の部分が多いので、
今回は除く。

まず、最も多く採られている方式である(a)は、ま
さに『唐話纂要』にしばしば見られた端的な注解方式
である。これは、逆に、その大部分が『唐話纂要』に
よつているとも言える。次に、(f)の注解方式は、『字
海便覽』に多く見られる方式である。すると、『語録
訳義』と他書との違いとして残るものは、(b)(c)の
〈出典を挙げる方式〉と(d)(e)の〈他書の注解を引
用する方式〉との二点である。

まず、この前者、すなわち〈出典を挙げる方式〉に
ついて述べる。その前に、注意したい点は、鳥居論考は
『語録訳義』が出典として挙げる書物の中に、『朱子
語類』を挙げている点である。鳥居論考は、「出典では

朱子語類（五十八）が圧倒的に多く引かれている（中
略）、その他程朱に關したものでは、二程外書（二）、
朱子全集（一）、朱子文集（五）、朱子書節要（一）、
朱子行狀（二）、謝上蔡語錄（一）などの名が見える
(数字は該書の引用回数)」と述べるが、正確にはこ
れは、〈用例〉というべきであつて、〈出典〉ではな
い。なお、その『朱子語類』からの〈用例〉の大半は、
『字海便覽』によつている。

さて、鳥居論考が指摘する〈出典を挙げる方式〉は、
計百箇所近くある。これを称して、鳥居論考は、「本
書注釈における著者の博引傍証ぶり（多少蕪雜なきら
いはあるにしても）は、とがく訓詁を喜ぶ漢学者たち
に対し何程かの魅力と興味を与えたであらう」と述
べる。そして、このような『語録訳義』の編集方針は、
旭山によつて受け継がれ、この傾向はますます強くな
り、これに加えて、原著には採られていない、俗語以
外の官名や地名などの語も採録している。

しかし、その一方で、鳥居論考は、「いわゆる孫引
もかなり多いことが推測される。このさい希齋が何に
よつたか、いわば出典の出典とも申すべき書物が何で

あるかは未だ精査していない」と述べ、「出典の出典」が存在する可能性を指摘している。

これに關して、本稿が調査したところ、『語錄訳義』において、出典を明記する語の大部分は、『困学紀聞』において既にその出典が指摘されていることが分かつた。『困学紀聞』は、「俗語は皆 本とする所有り」と述べた後、百語以上の俗語の出典を明らかにしており、『語錄訳義』は、そこでも挙げられている各語を画数別に振り分けているにすぎない。

ここで、鳥居論考より、『語錄訳義』が「出典として」引く主な書名およびその引用回数を抜粋する。そして、『困学紀聞』にも同じ指摘がある場合、鳥居論考より抜粋した引用回数の下に、「」付で、その回数を記す。ただし、先に挙げた〈用例として引く朱子学関係の諸書〉は省いている。

- | | |
|------------|-------------|
| 『淮南子』四〔1〕 | 『易』四〔1〕 |
| 『漢書』十六〔10〕 | 『後漢書』十七〔13〕 |
| 『國語』六〔6〕 | 『左伝』八〔2〕 |
| 『三国志』九〔9〕 | 『史記』七〔4〕 |
| 『詩經』六〔4〕 | 『周禮』四〔3〕 |

| | |
|----------|-----------|
| 『荀子』三〔3〕 | 『書經』三〔1〕 |
| 『晉書』六〔5〕 | 『水滸伝』四〔0〕 |
| 『莊子』四〔3〕 | 『文選』四〔2〕 |
| 『禮記』六〔4〕 | 『列子』五〔2〕 |

この一覧表から、『語錄訳義』の出典を示す注解の大部分が、『困学紀聞』と重なっていることが分かる。また、『困学紀聞』に「……に出づ」とあるものは、『語錄訳義』もそのまま「……に出づ」と記し、『困学紀聞』が一部、原文を挙げているものは、『語錄訳義』も同じよう原文を挙げている。このことから、『語錄訳義』が出典を明記する際は、ほぼ『困学紀聞』卷一九における記載によつていると考えられる。

要するに、(b)(c)の「出典を明記する」という注解方式の大本分は、希齋自身の手による調査結果ではない。しかし、この点をもつて、同書を低く評価する必要はない。これは、先学の俗語研究の成果を踏んだ結果であり、儒者の伝統として、「たとえ俗語であつても出典を明記する必要性がある」とする、希齋の見識の現れであるからである。

因みに、この『困学紀聞』卷一九は、『語錄解義』

所収の『語録辞義』にも引かれている。すると、『語録訳義』が、直接に『困学紀聞』によつたのではなく、閻斎が引用したものを、そのまま転用した可能性も高いと言える。なぜなら、『語録訳義』は、『困学紀聞』からだけでなく、『語録辞義』が引く他書からも引用しているからである。

そこで、次に、(d)(e)の「他書の注解を引用する」という注解方式について述べる。そこで、これも鳥居論考より、『語録訳義』が「注解のため」引く書名およびその引用回数を抜粋する。そして、『語録辞義』にも同じ解説が見られる場合、鳥居論考より抜粋した引用回数の下に、「」付で、その回数を記す。ただし、『唐話纂要』『字海便覽』『語録解義』『語録字義』などの和書は省いていいる。

- | | | | | |
|---------|---|--------|----------|-----|
| 『樂山錄』 | 一 | 『帰田錄』 | 一 | 〔1〕 |
| 『教坊記』 | 一 | 『玉篇』 | 三 | 〔1〕 |
| 『錦繡万花谷』 | 一 | 〔1〕 | 『古今韻會舉要』 | 二 |
| 『五雜俎』 | 三 | 『廣韻』 | 二 | |
| 『項氏家説』 | 一 | 『孔氏雜説』 | 一 | |
| 『皇明通紀』 | 一 | 『困学紀聞』 | 三 | 〔1〕 |

- | | | | |
|----------------------------|---|-----------|---|
| 『左傳』 | 一 | 『史記正義』 | 一 |
| 『字彙』 | 一 | 『字書』 | 一 |
| 『康熙字典』 | 一 | 『事物紀原』 | 一 |
| 『釈氏要覽』 | 一 | 『朱子文集』 | 一 |
| 『書言故事』 | 二 | 『助語辭』 | 一 |
| 『正字通』 | 一 | 『祖庭事苑』 | 四 |
| 『通鑑綱目』 | 一 | 〔3〕 | |
| 『通雅』 | 四 | 『通鑑輯覽』 | 一 |
| 『程子遺書』 | 二 | 『帝國說』 | 一 |
| 『典籍便覽』 | 三 | 『輟耕錄』 | 一 |
| 『唐會要』 | 一 | 『天台三代部補注』 | 二 |
| 『霏雪錄』 | 一 | 〔2〕 | |
| 『文苑彙雋』 | 三 | 『博物類纂』 | 一 |
| 『文中子』 | 一 | 『武備志』 | 一 |
| 『名臣言行錄』 | 一 | 『文獻通考』 | 一 |
| 『酉陽雜俎』 | 二 | 『篇海類篇』 | 四 |
| 『退溪集』 | 一 | 『野客叢書』 | 一 |
| 『六書正偽』 | 一 | 『容齋隨筆』 | 一 |
| 『留青集』 | 一 | 『六一詩話』 | 一 |
| 『龍龕手鑑』 | 一 | 〔1〕 | |
| 〔1〕の内、『語録辞義』が引く『玉篇』、『帰田錄』、 | | 『類書纂要』 | 一 |

『朱子文集』、および『退溪集』の計四条において、それぞれ、「打」で始まる語について解説している。そして、この中の計十四語についての解説は、『語録訳義』の解説と一致しており、どうやらそのまま『語録訳義』「五画」の項目に転用されているようである。次の「打張」を除く、「打張」から「打不過」までの語がそれである。

打過・打併了・打併掃斷了・打不過・打酒・打草
・打話・打魚・打船・打車・打水・打飯・打傘・
打衣糧・打黏・打量・打張・打試・打掃・打唆・
打点・打噏・打秋風・打畳

『語録辞義』においては、わずか四条の引用が、それが独立した見出し語となり、『語録訳義』においては、十四項目にふくれ上がっている。

このように、希齋の『語録訳義』は、闇齋の『語録辞義』を参考にしている可能性がある。すると、『語録訳義』が参考にした『語録解義』とは、巻末に『語録辞義』を付した闇齋本を指すとは考えられないであろうか。なぜなら、既に述べたように、『語録訳義』は、『語録解義』を基礎とするとして述べているわりには、

『語録解義』からの引用回数は、『唐話纂要』や『字海便覽』に比べて、あまりにも少ない。しかし、これに『語録解義』巻末の『語録辞義』からの引用を加えると、その引用回数は、計百回を下らず、ほぼ『唐話纂要』や『字海便覽』からの引用回数に匹敵するからである。

しかし、近藤論考も指摘するように、『語録辞義』に見られる記載は、すべて『文会筆録』にも引かれており、あるいは、『語録訳義』は『語録辞義』から転用したのではなくて、すべて『文会筆録』から転用した可能性もあるのである。また、実は、『語録訳義』に、「解云」として引かれる『語録解義』の記述は、『文会筆録』に引かれる『語録解義』の範囲を出ない。つまり、『語録訳義』が『語録解義』を引く場合、『語録解義』から直接引用するのではなく、『文会筆録』からの孫引きのようである。この点を考えると、他の『語録辞義』からの転用と思われるものも、やはり、『文会筆録』からの転用であるかもしれない。

そもそも、闇齋自身、俗語に通じており、近藤論考によれば、「闇齋が口語に近い語録体の文章をひとり

よく解説利用し得たのは、若き日、禪僧として禪書を広く研鑽したためであろう。（中略）そしてこの体験がそのまま『朱子語類』の解説に役立つたことと思はれる」。

そして、『語錄訳義』は、このよな師の研究成果をくまなく取り入れようとしている。たとえば、先に挙げた『語錄訳義』が引用する宋明の類書や箇記の類は、闡齋の『文会筆録』中にも、多く利用されているものばかりである。また、『語錄訳義』は、師説にならつて仏書を引き、あるいは「……ハ禪語也」「禪ニ云……ナリ」「禪ニハ……ト云意ニモ使フ」と解説し、闡齋がしばしば引用する『退溪文集』や『朱子書節要』といつた朝鮮系統に属す書物からも引用している。要するに、希齋の『語錄訳義』は、まさに、こうした闡齋の俗語に関する研究成果を集大成したものと言える。

最後に、『語錄訳義』の編纂目的について述べる。既に述べたように、『唐話纂要』は、唐話を学習すること、『字海便覽』は、語錄の類の訓詁法を知ること、『字海便覽』は、語錄の類の訓詁法を知ること」という、いずれも或る種の「技術」の習得を主指している。そして、両書の編纂目的は異なるもの

の、その「技術」の習得のため、両書は、いずれも教育的配慮に富み、非常に体系的に記されている。

では、このような冠山の撰述を、あえてばらばらにし、『語錄訳義』という形に編集し直した意図はどこにあるのか。その理由として、次の三点が考えられる。まず、一つには、冠山の撰述が、いざれも検索が困難であるためである。もちろん、だからと言つて、直ちに冠山の撰述を不便なものと見なすべきではない。それぞの使用目的に応じて、その構成が考えられていることは、前章に述べたとおりである。しかし、この難点を克服するべく、『語錄訳義』は、先に述べた画数索引という検索方法を採用したのである。なお、『唐話纂要』は、単語を字数別に分類し、やや辞書としての使用に堪え得るが、やはり、画数引きには及ばない。もちろん、画数引きという検索方法は、明代の『字彙』あたりに始まるごとにされており、希齋の独創といふわけではない。しかし、当時の闡齋学派を代表する儒者が、後学の学習の便をはかるため、自己の研究とは別に、このような教育的配慮に富んだ辞書を編纂したことはたいへん興味深い事実である。

さて、もう一つは、従来の俗語研究に、闇斎学派の研究成果を加味するためである。これは、『語錄訳義』がしきりに闇斎の『文会筆録』中に引かれる俗語の解説を転用したり、先人が指摘する出典を取り入れようとするなどして、先に述べた（他書からの引用）という形になつて現れている。

そして、もう一つは、闇斎学派の立場から、冠山を再評価するためである。あるいは、結果的に、そうなつたと言うべきかもしれない。青木論考（前出）に、

「冠山は決して無識な只一介の訳士では無かつた、頭の乾燥した語学者でも無かつた。漢学者として一世の重きを為す程の修養と学才とは無かつたにしろ、江戸に於て林鳳岡の門に程朱の学を修め経学に關しても一家の見を有してゐるらしい」とある。もちろん、学者としての知名度では、冠山は希斎をはるかに上回る。なるほど、冠山の撰述には、著名な学者がその序跋を記し、いざれも冠山の語学的才能については、皆手放しで称賛するものの、その学才に対する評価は高いとは言い難い。しかし、その卓越した語学力からみて、おそらく、冠山の撰述は、希斎だけでなく、儒者の間

おわりに

江戸時代における俗語の研究というと、まず、徂徠学派の名前が挙る。一方、闇斎学派については、ともすれば中村論考（前出）のように「その派は専ら居敬窮理と徳行を重んじて、文章を軽んじた」とされる。しかし、実際には、闇斎学派においても、俗語研究が盛んに行なわれていたのである。近藤論考に、「闇斎は読書に当り、その文義の眼目を把握するをもとより第一としたが、またその文を構成してゐる一字一句の意を把握すべく努力し、字義を苟且にするものでなかつた」とある。阿部論考（前出）にも、「〔闇斎は〕、

でも少なからず利用されていたと思われる。その冠山の撰述を用いる旨を、正面切つて「凡例」に明記した点は、まさに『語錄訳義』の見識と言えよう。そして、これは、すなわち、冠山の撰述が、儒者の語類研究に資する値いするものであり、ひいては、希斎の冠山に対する評価が並々ならぬものであつたことを示している。

わが国においては初めて朱子の文集・語類を精密に研究する態度をとり、特にその俗語の解説に注目した」とある。

また、阿部論考は、「わが国の『朱子語類』の語学的研究、もしくは中国俗語の研究は、荻生徂徠の師、岡島冠山の『字海便覽』（享保一〇年大坂刊）をもつて最初とすることは定説とみなしてよいことであろうが、その前に山崎闇齋が、李退渓の語錄研究の成果に着目し、これを利用したことは注意してよいことであろう」と述べる。すると、次のようなことが言えないだろうか。つまり、〈闇齋と冠山と〉という二つの俗語研究の流れをまとめ上げたのが、他ならぬ、この『語錄訳義』である。

『語錄訳義』以後、同書を越えるような、この種の辞書・参考書の類は出現していない。しかし、鳥居論考も指摘するように、『語錄訳義』は、増補本という形で、あるいは儒者の立場から、あるいは文学者の立場から、補われている。換言すれば、『語錄訳義』が語錄読解の手引書としての或る一定のスタイルを確立したと言える。また、『語錄訳義』は、〈辞書〉の形

態をとりながらも、『唐話纂要』や『字海便覽』のような〈技術〉の習得を目的としていない。山宮雪楼の『語錄訳義』「序文」にも、「公（希齋）の学大にして、此れ（『語錄訳義』の編纂）特た其の緒餘なるのみ」とあるように、闇齋学派にとって、俗語研究は、あくまでも語錄に書かれた内容を理解するための手段の一つであり、その目指すところは、やはり、朱子学そのものを理解することにあつたと考えられる。

注

- 1 この続編として、「秋水園主人『小説字彙』をめぐつて——近世日本中国語学史稿の二——」（『天理大学大学報』IV-2・一九五四）、「秋水園主人『小説字彙』をめぐつて・補遺」（『天理大学大学報』IV-3・一九五五）、「明治期における中国俗語辞書について——近世日本中国語学史稿之三——」（『天理大学大学報』XIV-1・一九六二）、「日本人編纂中国俗語辞書の若干について——近世日本中國語学史稿の四——」（『天理大学大学報』VIII-3

・一九五七) がある。

2 『近世漢学者伝記著作大事典』は、その凡例によ

れば、小川貫道『漢学者伝記及著述集覽』および竹林貫一『漢学者伝記集成』からかなりの資料を得ている。また、『漢学者伝記及著述集覽』は、その凡例によれば、『近代名家著述目録』、『近代著述目録後篇』、『慶長以来諸家著述目録（漢学家之部）』、『先哲叢談後編』、『先哲叢談続編』を中心に、その資料を得ている。一方、『漢学者伝記集成』は、その凡例によれば、『先哲叢談』、『先哲叢談後編』、『先哲叢談続編』、『近世先哲叢談正編』、『近世先哲叢談続編』を中心いて、その資料を得ている。

3 鳥居論考は、「（『語録訳義』は）、程朱の学に親しむ国人のことよなき参考書として長く需要をもつたと想像されるのである。その間に於て本書の利用者のいくたしかは、それぞれの立場に応じて新語を増し注解に筆を加えて利用価値の増大をはかつた。それが今日われわれの見る増補本のいくつかである」と述べる。そして、旭山の増補本に加えて、先に挙げた『唐話辞書類集』第一七集の『俗語訳義』をも

『語録訳義』の増補本の一つとして数えている。たしかに、同書は、旭山の増補本ほど完備していないが、なるほど、「淳」と自ら略称する人物の注解とそれを鈔写した富永辰の注解とが増補されている。また、鳥居論考は、この他、天理図書館所蔵のものを挙げ、同書における増補語がすべて『劇語審訳』から採られていることを指摘している。

4

この他、諸目録によれば、たとえば、国会図書館に四本（一本は「語録訳義」、残りの二本は「俗語訳義」と題する）、大阪大学（懐徳堂文庫）に一本（「俗語訳義」と題する）、東北大学（狩野文庫）に二本（一本は旭山の増補本）、二松学舎大学に二本（一本は「俗語訳義」と題する）、無窮会（織田文庫）に三本（一本は旭山の増補本で「語録訳義」と題し、残る二本のうち、一本は「俗語訳義」、もう一本は「俗語訳義」と題する）、無窮会（天淵文庫）に一本（「俗語訳義」と題する）、そして、大阪天満宮御文庫に一本、蔵有されている。

また、長沢規矩也「静嘉堂江戸時代編纂支那語関係書籍解題」（『書誌学』一〇卷二号・昭和二三年）

によれば、静嘉堂文庫に一本（「俗語訳義」と題する）、藏有されている。なお、同論考は、唐音関係書籍の蒐集者として中山久四郎および石崎又造の名を挙げている。この他、長沢規矩也が藏有するものについては、長沢規矩也「家藏江戸時代編纂支那語関係書籍解題」（『支那語学報』二号・昭和一一年）に紹介されている。

5 平論考（前出）は、希斎の俗語に關する撰述として、『俗語訳義』と『語錄訳義』とを挙げて、両書を區別して二つの異なる書とみなしている。そして、『大阪名家著述目録』（大正三年・大阪府立図書館）が希斎の撰述として挙げる「俗語訳義」、「写本（延享元年ノ序）」（一七四四）について、「延享元年の作は語錄訳義であるから、著述年代は、語錄訳義のそれと混同したものかと考えられる」（同論考中は、「俗語訳義」として引用する）と述べる。しかし、既に述べたように、『語錄訳義』と内容を同じくする、「俗語訳義」と題する書物が、事実、存在する以上、両書は、やはり、異名の同書ではなかろうか。

6 『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）によれば、

旭山の撰述は、『中庸講義』五巻、『旭山初集』一巻、『旭山晚集』四巻、『居業遊説』三冊がある。また、旭山は、闇斎学派の学者の事跡をまとめた『道學淵源錄』および『道學淵源統錄』を校訂しており、自身も『道學淵源統錄増補』巻下に収められている。留守希斎についても、『道學淵源統錄』巻四に記載がある。

7 「語錄訳義」の「凡例」には挙げられていないが、鳥居論考の指摘によれば、『唐話纂要』『字海便覽』『語錄解義』の三書の他に、元禄七年（一六九四）に刊行された『語錄字義』（一名、『語錄指南』）からの引用も少なくない。同書も、その書名から分るように、やはり語錄読解のための手引書である。その序文にも、「群書の要語を抜萃し、各おの其の下に諺解し、後に記誦詞章の階梯を附して、童蒙に便んにす」とある。この『語錄字義』も『唐話辞書類集』第八集（昭和四七年）に収められており、巻末には、「素読一助」が付されている。「解説」（『唐話辞書類集』第八集所収）に次のようにある。

初学者の為に、一字至五字（実は六字一語を含

む）部に分け、語句に訓点を加へ、下に双行、漢字交りの片仮名の訳文を注したもの。唐音を注せず、訳語亦こなれてゐないし、ときには誤もある。取材が後代のものの如く日常会話ではなく、語録その他によつたものであらう、純粹の俗語らしからぬものが少くない。何れも、唐話出版の初期のものであるから、やむをえないともいへよう。寛文二年、洛下の濫吹子の刊行の序文に、「語録指南序」と題するため、語録指南といふ書名で著録してゐる目録もあるが、同一書である。その序によると、友人が携へ来つて示したものとあるので、濫吹子の著ではない。

8 『唐話纂要』についての「解説」（『唐話辞書類集』第六集）に、『唐話纂要』中、各語に付された中國音は、すべて江南音を指すとある。青木正児『岡鳴那文藝論叢』所収・昭和四五年・春秋社）も「冠山の支那語は南方の音であつた事はたしかだ。室町以来支那との交通の行はれた地方は主として南方の福建杭州辺であつたし、今彼の著書に就て見ても南方

音と断定出来る」と述べる。

因みに、日原伝「岡島冠山と朝鮮通信使——正徳元年十月晦日の唱酬を中心に——」（『季刊日本思想史』第四九号・平成八年）によれば、朝鮮通信使との対談において、「冠山は「南京話」、「朝鮮通信使の」昌周（姓は鄭）は「北京話」を口談している。當時、長崎の唐通事は「南京話」「福州話」「漳州話」などについて各々専門の通事がおり、各地の方言にも通じていたらしい。ただ話されるのは中国南方の言葉であつて、北京語はほとんど話されたことはないという。……一方、朝鮮からは昌周自身が述べているように北京へ陸路交通が通じており、当然北方の言葉が主流となつてゐる」とある。

9 『唐話辞書類集』第六集所収の増補本『唐話纂要』の最終巻である巻五は、いわゆる単語帳的な、役割を果している。たとえば、「親族」として「玄祖」「曾祖」「祖父」などの単語を列し、「器用」として「器皿」「盒児」「香盆」などの単語を列するなど、以下、「畜獸」「虫介」「禽鳥」など、計十三の項目を挙げ、それぞれに属する単語（名詞）を（類書）

的に列挙している。そして、『唐話纂要』の巻一から巻四までと同様に、各單語の傍らには片仮名で中國音を、下には和訳を記している。そして、さらに、この巻五の巻末には、中國音を付した時調（流行歌）にも収められている。

10 岡島冠山に関する先行研究には、石崎又造『近世に於ける支那俗文学史』（前出）の他に、たとえば青木正児「岡島冠山と支那白話文学」（『青木正児全集』第二集「支那文藝論叢」所収・昭和四五年・春秋社）や鶴沼誠二「岡島冠山研究（一）—（四）」（『國語國文研究』四二・四五・四九・五〇）がある。鶴沼論考は、現在、『儒学と国学——「正統」と「異端」との生成史的考察』（昭和五九年・桜楓社）に収められている。最近のものでは、奥村佳代子「岡島冠山『唐話纂要』考」（『関西大学中国学会紀要』第一七号・平成八年）がある。また、岡島冠山の通事としての具体的な実績については、日原伝「岡島冠山と朝鮮通信使——正徳元年十月晦日の唱酬を中心に——」（『季刊日本思想史』第四九号・平成八年）がある。

11 石崎又造「京坂に於ける支那語学の展開」（前出『近世日本に於ける支那俗語文学史』所収）は、冠山の京坂における事跡については甚だ不明瞭ではあるものの、京坂においてもまた、冠山は、唐話の流布者であり指導者であつたとする。そして、江戸では単なる一時的な唐話流行に過ぎなかつたが、京坂においてはさらに進んで小説・戯曲の解説を誘致し、翻訳翻案等の企画となり、国文学への影響が深められていつたと述べる。また、『先哲叢談後編』巻三にも、次のようにある。

近世 稗官の学を以て世に鳴るは、晁世美・陶冕・岡白駒・秦熙載等。皆冠山を以て之が先鞭と為す。

12 『近世漢学者伝記著作大事典』（前出）によれば冠山の撰述は、『華音唐詩選』七巻、『指日』一巻、『四書唐音辨』二巻、『小説読法』、『唐話纂要』六巻、『唐訳便覽』五巻、『唐音雅俗語類』五巻、『唐話便用』六巻、『太平記演義』五巻、『尺牘辨解』五巻、『経学字海便覽』七巻、『三体詩唐音』二巻、『通俗忠義水滸伝』一〇巻、『康熙帝遺詔』一

- 卷、『通俗明清軍記』、『通俗元明軍談』、『唐音二体詩』三冊、『唐音和解』一卷がある。
- 13 鳥居論考は、実際に『語錄解義』と『唐話纂要』とを比較し、へ『唐話纂要』からの引用である」という但書きはないが、その解説が『唐話纂要』の記述と一致する語は、計一百三十語あり、また、明らかに『唐話纂要』を参考にしたと考えられる語は、計六十六語あると述べる。なお、『字海便覽』および『語錄解義』については、氏の手元にこの両書がなかつたため、同様の調査が行なわれていない。
- 14 『語錄解義』所収のものと、『唐話辞書類集』所収のものとを比べてみると、一部、文字の異同があるものの、同一の内容である。しかし、分量的に、前者は後者の前半約四分の一に当たる。先の「右、『常話万語』、浅見先生ノ雜記ヲ以写ス」という識語は、『唐話辞書類集』所収『常話万語』の、まさに、前半四分の一を終えたところに明記されている。
- また、『唐話辞書類集』所収の『常話万語』には、以下、「要」字自り此に至るまで浅見先生訓ず、「右、丁丑（一七五七）四月、浅見先生物語するな

- り」、「右、同月宵に録す 進居」、「「恪」以下乙酉（一七六五）晚冬廿三日夜、語類会に箇記す」という識語がある。「進居」は、絅斎の弟子の若林強斎（延宝七年—享保一七年、一六七九—一七三二）の名である。
- これらの識語から、『常話万語』が、絅斎を中心として開かれた『朱子語類』の勉強会の記録を含んでいることが分かる。したがつて、同書は、絅斎の言説を集めたもので、正確には絅斎の「著述」であるといえないものの、絅斎の俗語に関する理解を示す貴重な資料である。なお、近藤論考も指摘するよう、この勉強会の宝曆二年（一七〇五）の規約文である「語類会約」が残つており、『絅斎先生文集』卷八（『近世儒家文集集成』第五卷所収・昭和六二年・ペリカン社）に収められている。
- 15 「汪徳夏」については、近藤論考も指摘するよう、『羅山先生文集』卷九「書八」の「与汪徳夏」の題下に、「大明國邊鄙の賤き者なり。流落し東武に來りて脇坂淡路守に飢もらい、書を写して以て業と為す。頗る文字を知る」とある。

16

『江戸時代書林出版書籍目録集成』（慶應義塾大學附属研究所斯道文庫・昭和三七一三九・井上書房）に収められている延宝三年刊・天和三年改修本『新增書籍目録』の下巻、および、元禄九年本『増益書籍目録大全』の巻四、同宝永六年増修本の巻四、同正徳五年改修本の巻四に、それぞれ「語録解義」と題する書の記録がある。ただし、天和三年改修本『新增書籍目録』、および、元禄九年本『増益書籍目録大全』において、「語録解義」は、「儒書」ではなく、「仏書」に分類されており、あるいは、同名の異書であろうか。

17 内閣文庫所蔵の『語録解義』には、この延宝八年および貞享四年の識語はない。なお、新編『帝国図書館和書目録』によれば、国立国会図書館も「語録解義」と題する鈔本を一本、蔵有し、同目録は、「林信勝（羅山）著」と記している。石崎又造が挙げる、識語のある『語録解義』は、あるいはこの国会図書館所蔵のものか。また、補訂版『国書総目録』によれば、この他、日本大学、高知大学がそれぞれ一本ずつ、『語録解義』を蔵有している。

18 閩齋の撰述については、阿部吉雄「山崎閩齋の著書に就いて（一）（二）—主として朱子学関係書の略解—」（『漢學会雑誌』巻一第一号・第二号、昭和八年）を併せて参照されたい。ただし、同論考は、『語録解義』について、「未見、恐らくは閩齋の編著ではなく又その考訂に出づるものだと言ふ証拠もあるまい。（中略）語録解義は文会筆録中に屢々引いてある所のものである」とだけ記す。

19 なお、「再編集」と言つても、『語録解義』を、現在のような三部構成にまとめという意味ではない。なぜなら、それは、明らかに羅山や閩齋よりも後の人手による仕事であるからである。たとえば、閩齋本について考えるならば、『語録解義』の前に付されている『常話方語』は、既に述べたように、絅斎の弟子が編集したものであり、閩齋が孫弟子の編集を待つて、弟子の撰述の後に自署を付すとは考えにくい。そもそも絅斎がそれを許さないであろう。このことは、羅山本についても、羅山の生卒年から見て、やはり同じようなことが言える。

なお、閩齋本を三部構成にまとめた後人は、識語

に「山崎氏」と記していることから、闇齋学派の人間ではない可能性がある。なぜなら、たとえば、希齋が『語録訳義』に先人の説を引く場合、単に「荻生氏」「伊藤氏」と書くのに対し、必ず、区別して「闇齋先生」「浅見先生」「尚齋先生」と敬称を付けて呼んでいるからである。また、羅山本も、冒頭に「林氏編」とあり、本文中も、『羅山先生文集』(前出)では「先生」となっているところが、やはり「林氏」となっている。

しかし、本稿がここで問題としているのは、〈誰が原著『語録解義』を再編集したか〉ということであつて、〈誰が『語録解義』を現在のような三部構成に再編集したか〉ということではない。あるいは、『語録解義』は、初めから三部構成で刊行されており、羅山も闇齋もその編集に関わつていかない可能性もあるが、このことは、初版本『語録解義』およびその刊行年を確認しなければ分からぬことである。

20 『語録解』は、現在、国立国会図書館支部の東洋文庫に木活字本『語録解付藝海珠塵駢字分箋』(朝

鮮南二星・宋浚吉編・朝鮮刊・木活字本)が一本、同じく東洋文庫の、鈔本『語録解義付五才子書語録』(朝鮮南二星・宋浚吉編)が一本、蔵有されている。また、『和漢図書分類目録』(昭和三〇年・宮内庁書陵部)によれば、宮内庁書陵部も『語録解』を一本、蔵有する。また、『語録訳義』同様、楠本正継の家蔵本を底本とした油印本『語録解』(昭和二九年・九州大学中国哲学史研究室)がある。なお、この油印本は、巻末に画数引の索引を付し、巻頭には『退溪文集』から李退溪の俗語に対する解釈を摘出し、採録している。また、巻末には、索引を付し、検索に便利である。この他、朝鮮版『朱子語類』の景印本(中文出版社。ただし、同社による奥付がなく、また解題もない)で、その底本については未詳)の巻末にも、『語録解』の鈔本が収められている。

21 鳥居論考は、「『語録訳義』は、」画引というこの方面の述作としては画期的な検字方式がどちられている」と評しているが、『語録訳義』は、部首別に分類した後、画数順に並べるいわゆる字書ほど機能的ではない。また、頭字に異体字を用いたり、頭

字の画数の数え方に困難なものもある。そこで、鳥居論考によれば、氏には、「俗語訳義語彙」という、「語録訳義」の全語彙を注音符号順に配列したものを作成したようである。ところが、「鳥居久靖教授著作目録」（鳥居久靖先生華甲記念論集『中国の言語と文学』・昭和四七年・天理時報社）には、「俗語訳義語彙」という論考ないし単行本は見えない。ただ、油印『俗語考原語彙』（一九五四年・天理大学中国学科研究室）という、李鑑堂『俗語考原』の語彙を注音符号により配列したものがある。また、鳥居久靖「近代文学語彙研究資料（その一）」（『明清文学言語研究会会報』八号・一九六七）において、程万里『大明春』巻一の中の俗語解説を、発音順に

配列し直している。

22 鳥居論考は、「語録訳義」の注解方式に一貫性がない点をもつて、「語録訳義」は「俗語解」と似ているとし、後者を「俗文学の辞書」として、前者を「語録の辞書」と定義している。また、鳥居論考は、両者の内容を比較した結果、「語録訳義」が解説のために引用した書物が、「俗語解」における引用書とほとんど重複しないことから、「俗語解」の引用書が当時のいわゆる唐話学者の一般的読書傾向を示すものとするならば、本書（すなわち「語録訳義」）の引用書は儒者たちのそれを示すものと言い得ないだろうか」と述べる。

付録

| 探録文字 | 語録解義 | 語録解 |
|-------|-------------------|---|
| 1 也 | 亦也。 | 語辞、又……、眉訓、亦也、猶也。 |
| 2 擒 | 扶也。 | ……。○又扶也、取、又理亂曰療理。 |
| 3 他 | 彼也、又也、寔也。 | ……、又……、眉訓、彼也、又某人也。 |
| 4 恩 | 潤洞也、薦掌也。 | (なし) |
| 5 豐 | 左右驚顧、一云、視邊貌。 | 左右驚顧、又視邊貌。 |
| 6 似 | 向也。 | 向也、眉訓、亦於也、古詩云、去國一身輕似葉。 |
| 7 梦 | 亂也。 | (なし) |
| 8 生 | 語辭。 | 語辭。 |
| 9 捏 | 批也、又也。 | 音……、手打也、批也。 |
| 10 善 | 善也。 | (なし) |
| 11 做 | 工夫成意作也。 | 作也、又工夫成意。 |
| 12 跟 | 足蹤也。 | 音根、足蹤也。○又追隨也。 |
| 13 恨 | 悲也、又眷々貌。 | 音兩、悲也、又眷眷貌、又音朗、不得意。 |
| 14 直 | 正也。 | ……、又……。○物直……。 |
| 15 爭 | 何也。 | ……、又有事之謂。○……。 |
| 16 貼 | 付也。 | ……、俗所謂褶貼亦此意。○貼将来……。 |
| 17 將 | 持也。 | ……、眉訓、持也。 |
| 18 磨 | 乎字意。 | 語辭。 |
| 19 踢 | 跌也、行失正貌、又飛動貌。 | 音唐、平声、跌之也、頓伏貌、行失正貌、又飛動貌、又捨也。○見平声、……。 |
| 20 在 | 語辭、有在意。 | 語辭、有在意。 |
| 21 輓 | 車轂齊等貌。 | 音混、車轂齊等貌。 |
| 22 捶 | 持頭髮也。 | (なし) |
| 23 要 | 求也、欲為也。 | 求也、又……、又……。○音見平声及去声。要約〔也〕、勤也、〔固〕要也、察也、以上平声。久要也、〔恆要也〕、要会也、欲也、以上去声。 |
| 24 些 | 少也。 | (なし) |
| 25 却 | 在句末者、語辭、又旋也、埋却殺却。 | 語辭、又……、眉訓、還也、其在末句者語辭。 |
| 26 撃着 | 丁也、当也。 | ……、又……、眉訓、衝着也。 |
| 27 錐 | 解截也。 | (なし) |
| 28 下 | 猶言措置。 | 音……、下字言……、字……、下手……、下工夫亦同。 |
| 29 霽細 | 猶言頃細也。 | 猶箇箇也。 |
| 30 噠着 | 逢一。 | ……。○易序卦、嗑者合也、即是……之義、又嗑当作磕、有撞合之義、嗑頭謂之……。 |
| 31 霽 | 音揮、少頃也。 | 音……、少頃也、小雨也。 |
| 32 從來 | 自古來今也。 | ……。 |
| 33 從前 | 与上同。 | ……。 |
| 34 恶地 | 猶言如此。 | ……、猶言如此。○……、又……。 |
| 35 由來 | 從來同。 | 從來同。 |
| 36 摟落 | 撻一。 | (なし) |
| 37 從教 | 任他所為也。 | ……。 |
| 38 任教 | 与上同。 | 与任他之意相近、教有教使之意、為語助、下同。 |
| 39 什麼 | 何事。 | 与甚麼同。 |
| 40 伊麼 | 彼也、此也、何也、奈也。 | ……、又……、又……。 |
| 41 怎麼 | 何如。 | ……。 |
| 42 虐鬪 | 戰也。 | ……、恐此亦知是相鬪之意。 |
| 43 打空 | 漫意也。 | ……、猶言……。 |
| 44 摑來 | 成來也。 | ……。 |
| 45 一捺 | 一般也。 | ……、音茶、……。 |
| 46 一遭 | 一番也。 | ……。 |
| 47 一串 | 一貫也。 | ……。○……。 |
| 48 一介 | 一方同。 | (なし) |
| 49 一遍 | 同。 | ……。 |
| 50 一般 | 一樣。 | ……、又一種。 |

付録

| 採録文字 | 語録解義 | 語録解 |
|----------|------------------|------------------------------------|
| 51 一段 | 一塊。 | ……、猶言一片也。 |
| 52 一面 | 一方。 | ……、又……、又……。 |
| 53 一向 | 正一、直一。 | ……。 |
| 54 一等 | 猶言一種人。 | ……、又……。 |
| 55 一副當 | 一件也。 | 一件也、溪訓。 |
| 56 笑殺 | 一頓。 | ……、歐陽公詩曰、笑殺汝陰常處士、十年騎馬聽朝鶴。 |
| 57 物事 | 語辭。 | 事、語辭、如今數物、必曰、一事、二事。 |
| 58 地頭 | 地末。 | ……。○猶言本地也。 |
| 59 上頭 | 上首。 | ……。○……。 |
| 60 裏頭 | 內首。 | ……、又……、猶中也、頭語辭。 |
| 61 到頭 | 猶言到終。 | ……、眉訓、到極也。 |
| 62 若為 | 何為。 | ……。 |
| 63 閨子 | 語辭。 | 閨子、公文書也、子、語辭、如扇子、亭子之類。 |
| 64 忽地 | 奄一、忽。 | ……。 |
| 65 遮莫 | 遮、音折、猶言盡教也、又蓋置也。 | 遮、音折、猶言盡教也、……、遮、一作折。 |
| 66 打破 | 打棄也。 | ……、溪訓。 |
| 67 截斷 | 止也。 | ……。 |
| 68 惺、 | 至明貌。 | ……。 |
| 69 肚裏 | 腹內。 | ……。 |
| 70 濑、 | 淨也。 | (なし) |
| 71 拶到 | 皆來也、往也。 | ……。 |
| 72 這箇 | 於是也。 | ……、又……。 |
| 73 落、 | 高貌。 | ○灑落淨潔之意、灑灑亦同此意、又……。 |
| 74 自是 | 渠如前為也。 | ……。 |
| 75 上面 | 上邊。 | ……、外面、裏面、前面、後面、皆以此意推之。 |
| 76 許多 | 万也、幾也。 | ……。 |
| 77 胡亂 | 漫擾貌。 | ……、溪訓、又……。 |
| 78 提撕 | 執持也。 | ……、眉訓、提而振之也。 |
| 79 骨子 | 指當物也。 | 猶言……、指當物也、如言……。 |
| 80 賺過 | 過為連着也、一重賣也。 | 賺音潛、以賤物賣重物曰賺心、經所謂賺以大學不欺章連小人間居之章者也。 |
| 81 些子 | 小貌、乍貌。 | ……、又……。 |
| 82 放下 | 棄也。 | ……。 |
| 83 直下 | 直指下。 | ……。 |
| 84 話弄 | 漫意來往。 | (なし) |
| 85 自家 | 我也。 | ……、亦云我也、指彼而稱自己曰自家。 |
| 86 那裏 | 彼者、何處。 | ……、又……、眉訓、一彼處、一何處。 |
| 87 合當 | 相應貌。 | ……。 |
| 88 下夫 | 下手也。 | 下手也、恐与下工夫同。 |
| 89 未曾 | 暫末也、曾者疊也。 | ……、又曾……。 |
| 90 定疊 | 安頓也、疊亦定字意。 | 安頓也、疊亦定意、眉訓、堅定。 |
| 91 卜度 | 鬱韻也。 | ……。 |
| 92 逐旋 | 乾貌。 | ……、又……、又……。 |
| 93 摞 | 遮也。 | 遮也。 |
| 94 如 | 直指貌。 | ……、猶今鄉人有所歷舉則必由……也。○……、又……。 |
| 95 蔽 | 亂也、佳也、又引着也。 | 亂也、又引着也。 |
| 96 消詳 | 仔細也。 | 仔細。○猶言須用詳細也、漢語消与須同義。 |
| 97 闌珊 | 彫散貌。 | 餘殘欲尽之意、又意思彫散貌。 |
| 98 多少般 | 与幾多般同。 | 幾多般同。 |
| 99 知多少 | 某人遊而幾多也。 | ……。○唐詩〔花落〕知多少亦此意。 |
| 100 禁忌指日 | 猶偽學之貌。 | 猶偽學禁目。 |
| 101 撇眉怒眼 | 指禪學者。 | 指禪學人。○作氣貌。 |
| 102 作麼生 | 如何、又何事。 | ……、又……。○……。 |
| 103 担板漢 | 汝擔而人謂一面謂不見一面。 | ……、謂見一面不見一面。 |

付録

| 採録文字 | 語録解義 | 語録解 |
|----------|------------------------|---|
| 104 生面工夫 | 日新做功。 | ……、工夫。 |
| 105 開說話 | 漫而說話。 | ……。 |
| 106 担閣 | 猶言攬棄也。 | ……、不行貌、又一說……、眉訓、攬棄也。○……。 |
| 107 直下承當 | 正面的當。 | ……、又……。 |
| 108 招認 | 其人為而自說手。 | 招如今……、認引以為賦誣。 |
| 109 了 | 知也、卒也、事畢也。 | 語辭、又……、又……、又……、眉訓、在末句者事之已畢為之了。 |
| 110 着 | 有為也、倚着也、又使也。 | 猶言為也、又……、又……。○語辭、又使也。 |
| 111 作 | 為也。 | 為也、亦語辭。 |
| 112 夠 | 音向、担也。 | 音向、担也。 |
| 113 突 | 音窪也、始為穴也、南陽人呼穿土為窪、亦窪也。 | (なし) |
| 114 獄 | 音亥、癡也。 | 音埃、癡也。 |
| 115 誤 | 誤也、非也。 | ……、又……。 |
| 116 来 | 語辭也、有來意。 | 語辭、有來意。 |
| 117 才 | 与蟲同。 | 与蟲同、又……。 |
| 118 敗 | 与弼同。 | (なし) |
| 119 去 | 語辭、有去意。 | 語辭、有去意、眉訓、舍此事為彼事之意。 |
| 120 便 | 即也、又仮使也。 | ……、又……、又私伝如風便是也、眉訓、即也、又因人寄書謂之便。○音見平声及去声。安也、習也、便便言也、肥滿也、漫也、以上平声。利也、宜也、順也、便殿也、以上去声。 |
| 121 撒 | 音殺。 | 音煞、……、又音散、散之貌。 |
| 122 頭 | 直也、末也 | ……、語辭也、語端皆云頭。 |
| 123 你 | 汝也 | 汝也、眉訓、爾也、音…… |
| 124 管 | 領得也。 | 主之也、……、眉訓、縕摶也。 |
| 125 挨 | 推也。 | 音埃、推也。○按次謂之挨次。 |
| 126 較 | 適而兩物相比而差也。 | ……、直也、不等也、相角也、對兩而計其長短、又……。 |
| 127 犯 | 音紅、飛也。 | (なし) |
| 128 振 | 止也、又來之意。 | ……、又……、又……。 |
| 129 淚 | 皆也。 | ……、猶言全也。 |
| 130 没 | 無也。 | 眉訓、無也。 |
| 131 儻 | 任也、又極也。 | 任也。○……。○……。 |
| 132 懈 | 人也。 | (なし) |
| 133 合 | 的也。 | ……、又……。 |
| 134 滅 | 消也。 | (なし) |
| 135 線 | 音善、細糸。 | (なし) |
| 136 箭 | 触也。 | 音……、刺着也、……。○唐人奏事非表非狀者謂箭子。 |
| 137 抹 | 末也、又破棄也。 | ……。 |
| 138 底 | 極尙也。 | 當尙也、或作的、又……、又根底也、又与地同、又語辭。 |
| 139 解 | 知也、能也。 | ……。○解糧、解銀、押解、皆輸到卸下之意也。 |
| 140 拼 | 伐也、折也。 | ……、又……、俗析字。 |
| 141 漫 | 無聊意。 | ……。 |
| 142 得 | 語辭、又寬意、有得意。 | 語辭、又……、有得意。 |
| 143 会 | 和解也。 | ……。○……謂之一会二会。 |
| 144 恰 | 合是也。 | ……、眉訓、適當之辭。 |
| 145 鎮 | 恒也、長在貌。 | ……。 |
| 146 那 | 彼也、何也。 | ……、又……、眉訓、彼也、又……。 |
| 147 剥 | 即浙字。 | (なし) |
| 148 還 | 語辭、有却意。 | 語辭、又……。○……、又……、又……。 |
| 149 然 | 与殺同。 | 与殺同、……、音……。 |
| 150 差 | 不等也、与較同、相角也。 | ……、与較同、又差出之意。 |
| 151 遇 | 公伝。 | 公伝也、附通伝書謂之遇。○納也。 |

付錄

| 採錄文字 | 語錄解義 | 語錄解 |
|------|--------------------|--|
| 箇 | 語辭、又介也。 | 語辭、有一箇、二箇之意。 |
| 交 | 交付也、与教同。 | 交付也。 |
| 捺 | 乃曷切、又手接也、又壓也。 | 乃曷切、捎也、又手接也、……。 |
| 便 | 私伝也、便中、便人、便風、皆一語也。 | (前出) |
| 般 | 一也、与搬同。 | ……疑惑……、又……。○一般二般之般也。 |
| 按 | 下也、考也、禁也。 | 下也、又考也、又禁也。 |
| 訛 | 別也、辭也、永別之辭。 | 絕也、又別也、又辭也。 |
| 靠 | 音告、憑也。 | 音告、憑也。 |
| 和 | 從也、別本合于本物曰和、又答。 | 猶言……、以別物合此物曰和、……。 |
| 免教 | 避也。 | ……、又……。○此教字、疑或語辭。 |
| 閑 | 遊也、等閑謂不緊無益。 | ……、又……、又……。 |
| 怎生 | 何也。 | 漢語怎、何也、生、語辭、……、眉訓、何也。 |
| 摺 | 音搘、折也。 | 音……、又……、眉訓、……。 |
| 研 | 究窮。 | 磨也。○窮也、……。 |
| 解 | 脫棄也。 | (前出) |
| 依前 | 上同。 | ……、又……。 |
| 甚麼 | 心也。 | ……、眉訓、何等。 |
| 争奈 | 彼然而我何也。 | ……。○……。 |
| 橫却 | 斜衝也。 | ……。 |
| 委意 | 知貌。 | ……。 |
| 点檢 | 審察。 | ……、又……。 |
| 只管 | 乍而領得也。 | ……、又……。○……。 |
| 都慮 | 皆而置也。 | ……。 |
| 照領 | 昭晉同、審而領悟。 | ……。○猶云照數次知也。 |
| 伶利 | 分明也。 | ……、眉訓、分明也。 |
| 的當 | 合當意。 | 合當之意、猶言……。 |
| 主張 | 張云意。 | ……、自主已意而張皇之、猶……。 |
| 巴鼻 | 頭尾也、又倚着也。 | ……、語類、沒巴沒尾、未詳。○漢語禽獸之尾謂之尾巴、此謂巴即尾也、鼻即頭也、似是無頭無尾之義、又一說大蛇謂之巴曾也、漢人遇大蛇用小筆一打其鼻便死、所謂巴鼻、恐是要切處之意。 |
| 撮合 | 一會也。 | ……、又……、撮合作漢○猶言幅輶也。 |
| 拈出 | 執一。 | ……。 |
| 直饒 | 仮使任其所為也。 | ……。○仮使之意也。 |
| 知道 | 識也。 | ……。 |
| 单提 | 稜之貌。 | ……、眉訓、獨擧也。 |
| 特地 | 各別也。 | 各別也、又……、漢語……、又特別……。 |
| 卓午 | 日中也。 | ……。○日中也、猶言晌午也。 |
| 獸、 | 如此迷惑。 | ……。 |
| 巴頭 | 異巴歌、不用之歌、異不明之歌。 | (なし) |
| 替你 | 汝而一伐也。 | (なし) |
| 腔子 | 猶軀殼子。 | 軀殼。 |
| 体当 | 猶言體驗甚當。 | 如云体得、體驗、堪當。 |
| 揩背 | 脊一也。 | ……、揩、猶言撫摩之意。 |
| 索性 | 猶言窮源也。 | ……、漢訓。○猶言直截、又……。 |
| 僬僥 | 短小人也。 | 短小人。 |
| 公案 | 官文書。 | ……、漢訓。 |
| 谷簾 | 廬山瀑布散為簾也。 | 廬山瀑布散流如簾。 |
| 下稍 | 終也。 | ……、漢訓。 |
| 親事 | 昏事也。 | 婚事。 |
| 取殺 | 畢終也。 | ……、畢終也。 |
| 末稍 | 亦終也。 | 与下稍同。 |
| 即當 | 散潤也。 | 舞態也、反復不正之貌、猶俗言……、猶狼藉也。 |
| 脣合 | 夫婦各半体合為合下初也。 | 夫婦合半体合為一也。 |
| 頓放 | 安置也。 | ……。 |
| 拆弓 | 考官開見擎子卷号也。 | ……、又傍……。 |

付録

| 採録文字 | 語録解義 | 語録解 |
|---------|---------------|--|
| 205 敷遣 | 州郡勸送之意。 | (なし) |
| 206 鑄戢 | 猶言銷除。 | (なし) |
| 207 放着 | 亦置而安也。 | ……。 |
| 208 強輔 | 益友也。 | 直諒友朋也。 |
| 209 鄉上 | 言向道。 | 鄉、向也、上、形而上之上、謂天理也、言向道理。 |
| 210 津遣 | 道路資送之意。 | 道路資送之意。 |
| 211 過着 | 已為也、着有過意之意。 | 已為也、看字有過意、又与消同、猶言……。 |
| 212 譾醜 | 酥之精液養成性令人無心。 | 酥之精液養性能令人無妬心。 |
| 213 分疎 | 猶發明也。 | 猶發明也、溪訓。 |
| 214 推鑑 | 穿也。 | 穿也、鑑也。 |
| 215 地步 | 地頭也。 | 頭也、又地也。○猶言里數也。 |
| 216 使臺 | 監司兼風憲。 | 監史兼風憲。 |
| 217 傷、 | 無見貌。 | 失路貌、音長、又見敬韻。 |
| 218 不托 | 餅也。 | 或作餅餉、……之類。 |
| 219 解額 | 解使遣之意。 | 秋圃鄉試之額數也。 |
| 220 下落 | 猶帰宿也。 | ……、猶帰宿也。 |
| 221 下平 | 一長貌。 | (なし) |
| 222 儂侗 | 猶含糊。 | 猶含糊、又溪訓、不分明也。 |
| 223 胡写 | 亂書也。 | 亂写也。 |
| 224 除是 | 但也。 | ……、除是人間別有天、是……除……人間各別……天……、又……。○猶言須是也、又俗稱除是非之語。 |
| 225 何曾 | 何如。 | ……、又……。 |
| 226 閑汨董 | 朽木也。 | ○間、間漫也、汨董、南人雜魚肉置飯中謂之汨董羹、謂雜亂不切之事也。○漢語汨從木間相董猶朽株擗也。 |
| 227 除非 | 未有不如此而能者也。 | 与除是同、又……、又只是之義也。 |
| 228 較些子 | 小而展貌。 | ……。○……。 |
| 229 骨董 | 飲食雜烹之羹、一一羹雜也。 | 雜也、義見三字類。 |
| 230 幾多般 | 幾何持也。 | ……。 |

この一覧表は、閻斎本『語録解義』と語彙数の最も多い木活字本『語録解』とを底本としている。表内に「……」と記す箇所は、ハングル表記の部分を略記したものである。なお、「溪訓」とは、李滉（退溪）の注であり、「眉訓」とは、その弟子の柳希春（眉巖）の注である。